

光明寺の大師 三七四
此境にいたるとき佛と我と互に相分れながら、而も佛の御心と我が本
心と同一の佛智であり同一の慈悲である故彼と此とどうして相應せ
ぬことがあらうか。琴の絃が共に相鳴るやうに佛の御胸と我が此胸
と互に打解けて靈の水があなたよりこなたにこなたよりあなたにさ
はりなう相通ふのである。人と人と打解けてさへ無量の趣があるの
に今永劫の旅路を終へて世々生々の初事に久しく待たせたまふ大悲
の大御心に接し其御光により其御名により彼の御心に融け合ふ其慶
喜は如何計であるか。まして此時行末を望んで見ても今既に如來の
御心の中に在れば此後復た流轉の巷に生を享くるはずはない。長へ
に如來と俱に立ち如來と俱に進むことを感じて見ればどうして喜ば
ずををられやうか。それ故この佛心と我心とが相應して二つが一つ
に合うた一念は再び流轉の生なき法を認めたる一念佛智をさとした
一念信じた一念又喜びたる一念である。それ故之を無生法忍と名づ
けらるゝ。而して其中には悟忍信忍喜忍の三が備はつて居る。こゝに

忍といふは耐忍の忍ではない認定といふことであつて明確なる實感
の謂である。この三つの實感をもつてを無生法忍即ち向上解脱の
實感是れ正しく摩竭陀宮中の囹圄に在つて王后韋提希が釋尊の御引
立によつて得られた所のものである。而も是れ此王后のみの得る所
のものではない私共亦王后と等しく此法忍を獲ることができるので
ある。而して一度得たる此不朽の靈覺の因はもう滅ぶといふことな
く曠劫の昔より受け來つた迷妄の餘習如來の御光によつて全く消え
去る時私共は此因によりて光明の引導の下に無量光明の御國に入り
即時に完く諸法の本性を了得して其中に流れ亘つてを常住妙樂の
旨を證り得ることができるのである。一行者正しく金剛心を受けて慶
喜一念相應の後韋提と等しく三忍を獲て即ち法性の常樂を證すとい
ふは此意であります。

六。嗚呼徒に高く徒に遠いのは私共の道でない。私共の道は低い
又近い。低くして近い出立點より高くして遠い無窮の頂上に私共を

引き上げたまふのが私共の道である。私共は隣人の寶を數へて自家の富を破るやうな愚かなことを致してはならぬ。先づ下れ、そこに道あり。遠い他人の道に眼を向けず、まじめに己に反つて先づ脚下に備へられた道に立つことが最も大切である。僅な力を恃んで巖の上に噴き出で、は復た降り、又噴き出で、は又降つて絶間なく薄噴い霧間に流轉してをる谷水よりは、其道の導くまに、下つて明るい村中に、出で温かな日光を浴びながら、縁滴る渚に歌ひ、紅燃ゆる花と語り、遠からず彼の大なる春の海に入つて、そこに彼の光の力に乗つて高く天上のさかえに入るを樂みながら、ゆるゆると流れ行く流水の方が、いかにばかりか幸であらう。先づ下る。この一語に私共の現在及び將來の榮光は含められてをるのである。實に善導大師は此謙遜の大義を私共に傳へむために、此世に出で、此大義を傳へ終はられたゆゑに、此世を去られたのであります。

第十五章 横川の僧都

(上) 人格上の指導

源信廣開一代教、偏歸安養樹一切

【源方】 源信廣く一代の教を開き、偏に安養に歸して一切を勤めたまふ。

【字義】 一代とは釋尊の御一代をいふ。

【大意】 源信僧都は、廣く釋尊御一代の教法を開き、其中において自分は唯偏に安養往生の一道に歸し、又それを普く一切の世人にすゝめられました。

【文科】 第六祖の御一生を宣へたまふ一節である。

一。今年の秋に、たゞばらくと後の圃に振り落された樹の實でさへ來む年には、大方は生い出で、參ります。代々の祖師が真心こめて私共のために播きつけたまうた斯道の種が、どうして盛に茂り合ふやうにならぬことがあらうか。不朽の光によつて播かれ不朽の光によつて育てられた不朽の種は、どのやうな處にあつても、決して朽ち果つ

ることはない。益々榮え行く定命を其中に具へられてある。されば時が愈々加はるにつけて、斯道は愈々世の中にひろまらせられた。殊に光明寺の大師以後、大陸に於ける斯道の流布は極めて盛であつた。そこで恰も草木の實が、風に吹かれ、鳥に運ばれて、あちらこちらに移り行くやうに、斯道の種子は、多くの人々により、否多くの人々を動かして、彼大陸より海を越えて、遂に此日本に移りたまふこととなつた。平生私共は之について、さほどの感じをもつてをらぬ。けれども若し此事がなかつたとして見よ。如何であつたであらうか。私共は皆今猶煩惱の暗路に悶えて居るに相違ない。私共は茲に斯國に生まれて、斯道に遇ひ奉つた自分の宿縁の厚いのを喜び、謹んで大悲の御引立の懇なのにて感謝せねばなりません。

二、歴史に傳へられてある。今より丁度一千三百六十四年前即ち欽明天皇の第三年大陸では第三祖曇鸞和尚が遙山寺に寂せられた其年の十月十三日百濟から阿彌陀佛の尊像一體海に漂うて難波につか

淨土教の
日本傳來の
通及び其流

「念佛要
文集」の
所記と傳ふ
に依り

せられたと。是れ我國が大悲の御像を拜した最初である。其後十年を経て、復た尊像と「大觀」「小觀」の三經及び諸經論と諸論釋とが、皇室に入りたまうた。そこで斯道の光が、先づ朝廷に輝いた。中にも聖德太子は深く之に歸せられた。それより斯道の修行廣く四方に及んで、讀誦觀察禮拜稱名讚歎供養皆頗る盛に勤められた。天親曇鸞兩祖の「論」と「註」も早く渡り來つて、元興寺の禮光は「註」によつて、新に「論」の註を書かれた。善導大師の釋疏の中「禮讚」は延暦二十四年に「法門」と「般舟讚」とは承和六年に「法事讚」は承和十四年に、而して「觀經疏」は、それより十一年を経て、天安二年に渡らせられた。かくて斯道は斯國に段々盛になつて參つたが、中にも叡山では別して盛であつて、弘仁九年此山の開基たる傳教大師最澄が始めて行はれた念佛三昧の法は、其歿後益々嚴に修められて、明々たる稱名の聲は、つねに三千坊の雲に響いて居つた。されば空也永觀のやうな大徳亦此間に出で、或は旅僧となり、或は馬夫とまでなられて、廣く市井の間に念佛の行をすゝめらるゝやうになつ

た。向上の氣鬱然として斯國の人心に萌して參つたこと洵に驚くべき程である。けれども斯道の眞實義がまだ人々の前に示されて居なかつた。淨土の三經はかたの如く本堂に誦せられて、まだ其眞旨を味ふ者がない。善導の御疏の如きも空しく比叡の經藏に藏められたまゝであつた。それ故是等修道の人皆共に燃え立つやうな熱心を以て驅け回はつて居らるゝけれども、單に斯道の形を行つて居るに過ぎぬ。どうしてもまだ眞實の生命を掴むことができぬ。されば聲高く御名は唱へらるゝ容殿に禮拜は勤むるけれども何となう物足らぬ感じは常に此人々の心底を離れぬ。そこで折角の大志も、をのづから疲れない譯にゆかぬ。既に疲るゝ故生活上の厭倦と此疲勞と相合して、益々此人々を憔悴せしめて、斯道に於ける剛健の意氣一般に消え失せやうとする傾向が出て參つた。是れ王朝中頃の情態であつた。されば時勢は正に何人か出て、今日の私共の先進たる其頃の人々を彼等のために又私共のために、又私共の後進のために、此哀れな境より救ひ出して

下さらねばならぬやうになつて參つたのである。この方は誰であらうか。誰が茲に斯道の奥底に流れてをる生命の新泉を掘り來つて、今抑へ難い渴きの苦に喘ぎ／＼して、將に倒れやうとしてをる斯修道上の先進に飲ますことをせらるゝであらうか。私共のために第六の指導者として現はれたまうた源信僧都は、即ち此人であらせられた。

三 此僧都俗姓は卜部父の名は正親母は清原氏朱雀天皇の天慶五年、即ち今より正に九百六十四年前に、大和葛木郡當麻の里に誕生せられた。暫く兩親の愛撫の下に育たれましたが、僧都七歳の時父正親は、どうぞ出家して道を修め、我冥福を祐よといふ一言を遺して、遠く彼世へと去られた。其後僧都の母君は何とぞして亡き夫の望を完うせねばならぬと志されて、一心に僧都の身心の教育に心を注がれた。此父母の赤心は、僧都の幼な心に深く浸み渡つて、そのため少しも父君の遺言を忘れず、折々程遠からぬ高尾寺の佛前に跪いて、修道を誓ひ、照壁を請はれた。僧都九歳の時であつた。或夜の夢にいつものやうに高尾

横川の僧都
寺に参られた處藏の中に澤山の鏡がある其側に一人の僧が居られて
其中から小く又曇つてをる一面の鏡を僧都に與へられた。すると
僧都はもつと大きく奇麗なのを下さいと請はれた處其僧のいはるゝ
にはそれをもつて横川に参り彼處でそれを磨けとの事であつた。夢
覺めて後之を母君に語られた處母君の申さるゝには鏡といふは智慧
を譬へたものである智慧既に明かならば磨くことはいらぬ去ながら
其方はまだ幼くあつて其智慧が暗いそれ故叡山の横川に参つてそれ
を磨き上げたならば望み通りの立派なものを得ることができるとの
佛の御指圖であらうと申された。僧都は之をきいて深く喜び勇まれ
ました。

四 此年叡山の山僧でふと此里を通る者があつた。村端で此幼兒
に遇ひ其穎敏なのを認めてそのまゝ打捨つることができぬ。そこで
僧都の家を訪うて母君に會ひ今や我師良源山にあつて後進の教育に
努めて居らるゝ故此兒を師の許に出だされては如何であるかとのこ

とを談じた。母君は之を聞かれて善く前日の夢にも合ひ正しく亡夫
の望自身の志にも契ふことである故深く喜ばれてすぐさま承知せら
れた。そこで旅僧はさらば一と先づ歸つて之を師の僧正に申し其上
迎の使者をよこさうと約して山に歸つた。

五 既にして使者が参つた。母君は僧都のために手づから新衣を
縫ひて之に着せ懇に行末を誡めて其上一つの錦の囊をわたしながら
中に『阿彌陀經』一卷がある之は其方の父君の常に御伴して居れた所
ものであれば常に之を誦して父君の御志を忘れてはならぬと申しわ
たされた。僧都は涙を拂つて之をいたゞき暇を告げて使者と共に北
の方叡山に向はれました。

六 嗚呼一卷の『阿彌陀經』終生父を導きたまうた一卷の斯經は今
や母の手を経て僧都の小さき手に授けられ終に此幼兒を罪惡の塵寰よ
り引き上げて大道の門戸に向はしめられた。僧都が自力異見の喧鬧
場裏にありながら高く他力信念の靈臺を占めて動かれなかつた原因

は、既に此時より植え付けられたのであります。

七。さて叡山の座主良源は、僧門の英傑であつた。深く僧都を愛し、自分の名の一字を與へて、源信と命じ、其卓犖の威力を以て、僧都を薫陶せられた。僧都も亦奮勵して之に従はれた故、其進行は著しいありさまであつて、聲名夙く山上山下に響いた。天曆十五年僧都十五歳の時、村上天皇の請によつて、『阿彌陀經』の異譯たる『稱讚淨土經』を宮中に講せられた。天皇いたく感ぜられて僧都の位を送り、法禮として布帛を捧げられた。何を申してもまだ十五歳の少年たる僧都は、此厚待に接して、竊に歡喜にたへられなかつたであらう、すぐさま使を馳せて當麻の母君に之を贈られた。而して心の中には益し母君の稱讚を待ち、設けられたのである。然るに聰明なる母君は、恐ろしい驕慢の惡魔が、將に我愛兒を嗜み殺さうとして居るのを認められた。そこで直に其布帛を返し、且つ手紙を以て申さるゝやうは、山に登らせたまうてより、日暮心碎くるばかりに慕はしく思ひながらも、貴き法師となりたまふこと

ゝ、そののみを樂みに待つて居たのに、内裏に入り、衣の色をかへ、御布施をうけて、名聞利養に迷はせたまふこと、何たる御考であるか、唯樹下石上草衣木食にも安んじて、偏に行先の大事をのみ修めたまふやうにと願うて居たのに、名聞のために説法し、利養のために布施をとる、是れ更に出離の御動作ではない、かくの如くにて過ぎたまは、復た輪回の御身となりたまふぞや、若し之を面目と思ひたまは、それは迷である、夢のやうな世にあつて、同じ迷にはだされてをる人々に名を知られて、何にせやうか、永い後に覺をさはめて、佛の御前にて名をあげたまへ、如法の聖でさへ布施に心を動かさば、地獄に焦ると申せば、之をいたゞいて、私は何に致さうか、さればこのまゝ、使者にかへすとの事であつた。僧都は之を聞いて、感激已むことができなかった。そこで今まで出世の道に向ひながらも、まだ之を世をわたる橋とおもひて、踏んでをられたに、いまや此叱咤に遇うては、じめて出世のまことの道に入らるゝことができた。洵に如來の大道は、修身のためでもなかつた、齊家のためで

もなかつた又治國平天下のためでもなかつた、まして功名利達を漁る道具でもなかつた。それよりも猶々高大であつて永遠に亘る一大事、因縁のためであつたのであります。

八 之を感じ來つて僧都は深く内心の飢渴に氣がつかれた。「夜もすがら佛のみちをもとむればおのがこゝろにたづねいりぬる。今迄は我心功名や利達のことのみ馳せて居つた故、自心の實相には氣がつかなかつたけれども、今初めて己に反つて見れば、痛く自己の衷心が飢えてをることを感せられた。そのため是非とも先づ之を満たさねばならぬことを自覺せられた。そこで此衷心の飢をいやすべき糧を得んために、大藏經を五度繰返して緝かれた。大乘小乘の法門顯密二教の玄理殆ど涉らぬといふ所がない。けれども皆自分の糧でなかつた。是に於いて僧都はつくづく自分の頑魯の者であることを自覺せられた。自己既に頑魯の者である、さらば利智精進の人のために説き示された彼の法門彼の玄理皆、自分の道業はない。唯是れ隣家の寶で

はないか。自家の富は、自分の財によらばならぬ。而も自分は飢えてをる。貧に沈んでをる。この飢えて貧い自分は、どこから自分の財と食とを得ることができぬであらうか。僧都はひたすら此ために苦心なされた。そこで山を下つて遠く伊勢の大廟に詣り、眞實大安の道を此孫に示して下さるやうにと、深く神祖に祈られた。満願の夜の夢に、一神女が唯阿彌陀佛を念するより外はないと告げられたことを感せられた。そこで志を念佛に注いで、唯此一道に向はれたが、まだ決定の思になることができぬ。それ故六波羅密寺の空也を尋ねて淨土往生の志があるが果して之を成就することができぬであらうかと尋ねられた。其時に空也は厭離穢土欣求淨土、この心さへ偽なくば間違ふことはない、と答へられた。僧都は大に感せらるゝ所があつた。其上當時世塵漸く比叡の靈山を犯して、靜觀靜修に便宜しからぬ故、僧都が厭離の志は益々切になつて、天祿年中、即ち僧都三十歳前後、断然山北横川の楞嚴院に入られました。横川の地谷深く、雲白く、松嶺泉聲一とし

て修道の縁にならぬものはない。僧都は茲に在つて靜に清淨身の聖相を仰ぎ廣長舌の梵音に耳敬で、一心に大道の進修につとめられた。今や良源以上大悲の慈尊は正に僧都の大師として直に其前に降り其手をとつて導かせられたのであります。

九、されば僧都の精神の歩がどうして進まぬことがあらうか。經論の繙讀少しも怠りたまはぬ上、殊に道緯善導兩祖の釋文を開き懐威の「群疑論」を開いて終に他力念佛の大道のみ、此頑魯の者の權である。往生極樂の教行のみ、濁世末代の目足であることを確信なされた。此確信によつて僧都は始めて衷心の飢を癒された。我と離れてをる聖道八萬の法門は是れ我財でない、我がものとして我心に投げたまふ此御名のみ我寶である。「利智精進の人」のみを呼びたまふ十方三世の諸佛は、我佛でない、此頑魯の者の心に慈悲の御手を垂れたまふ阿彌陀一佛のみ、我父である。「念々聲々唯阿彌陀佛に在り」。我心今此我父に在つて、此我寶を受け茲に住み、茲に満たされ、茲に息ひ、茲にはたらく、また

源信僧都の入道

何の飢があり疲があらうか。僧都は茲に自ら斯道の中に、生命の新泉を掬ひ得られたのである。生命既に我に動いて見れば、茲に力ができ智慧が得らるゝ。さきに捨てたる八萬の法藏は、今や來つて皆我に入り共に皆我を養ひたまふ。是に於いて僧都の御胸に化他の志が萌した。自ら掬ひ得たる泉を、是非とも又他に掬ひ得させたいと望まれて、廣く利導の途に進まれた。而して其旗標は實に厭欣の二字でありました。

一〇、厭欣具にいへば厭離穢土欣求淨土實に是れ此道の門の二本柱である。梯子を昇るには下段をすて、上段を求めねばならぬ。途を歩むには後を去つて前に向はねばならぬ。如來の大道に進むも亦同じことがある。此自分の穢れたる土を厭ひ離れて、彼如來の淨かな土を欣ひ求めねばならぬ。若し此穢土を厭はずして、彼淨土を求めやうといふか、それは下段に足をつけておいて上段に進み、後を離れずして前に向はうとすると同じく決して出來ることでない。さらば其厭

厭離欣求の意義

ひ離るべき穢土とは何であるか。此世である。此世の一切である。佛を除け奉りて外の凡てである。今佛に到らむとするに佛でない者をとらへて居つてはならぬ。國家社會組合家庭之は佛でない。すてねばならぬ。地位名譽財産家宅之も佛ではない。掴まへて居てはならぬ。父母妻子朋友親族どれほど親しからうとも亦是れ佛ではない。之をたよりにして居つてはならぬ。さらば自分はどうであるか。身はといへば今に消え行くやも知れぬ風前の燈のやうな果敢ない身の上ではないか。心はといへば濁りに濁り汚れに汚れてをる而も其上に變轉動搖暫くもやまぬやうな頼りないものではないか。どうして之を永久のたのみとすることができやうか。されば自分以外のものは凡てあてにならぬ。自分以内のもの亦凡てあてにならぬ。而して自分共者も亦あてにはならぬ。このあてにならぬものをあてにしたよつてはならぬものをたよりにするとき泥船のために苦んだ狸の話は遠いことでない。私共も同じく永遠に苦海の中に惱まねばならぬ。されば我共

は全く此自分以外と自分と凡て佛ならぬ世の凡てを厭ひ離れねばならぬ。世には世を厭うたというて世を怨み人を怒り或は世を罵り人を唾うて獨り山林の中にあつて自ら得たりとしてをる者がある。或は世の中がうるさいというて自殺を企つる者がある。けれども是等はまた本當の厭離を味うてをる者ではない。假に自分以外の世は厭うてをるとしてもまだ自分共者をえらいとしてをる。自殺者は自殺せやうといふその我分別を正しいものとしてをる。中には他人の行ひ得ぬ自殺を取て行ふ自分の勇氣を誇つて自殺する者がある。是等は全く驕慢の邪路に陥つて居るのである。私共は此邪見の徒の後を逐うてはならぬ。又世には全く自分すら厭ひすてたといひながら佛によるについて自分の分別を雜へてそれによつて佛を見佛によらうとし甚しきは自分の胸の奥に自分の了見で佛を畫いて之を仰ぎ之を奉せやうとするもある。亦是れ充分に自分に手ばなれをしてをらぬ者であつてやはり驕慢の弊竇に沈んでをる。私共は此表面は微

細なやうであつて、而も其實力強い間違つた考をもつて居てはならぬ。自分の外も内も、凡て此世のはからひ我がはからひ、皆之を脱離せねばならぬ。されば必ずしも浮世をすて、山林に入るに及ばぬ。入る自分が亦厭はしいもの故、必ずしも自分をすて、世俗にのみ従ふに及ばぬ。其世俗亦厭はしいもの故、つまり所唯此世ならぬ、自分ならぬ、如来の大御心之のみを仰いで、如来ならぬ此世、如来ならぬ自分、皆之を見ぬ。是に於いて私共は始めて、明に如来を知り、如来の御心に入ることができ。如来の御心に入つて、而して下を振り回つて見れば、嗚呼大なるは如来の御心なるかな。この御心は自分の穢多し身と心とを忌みたまはぬのである。穢多し此世の上にも、其御光を投げたまふのである。我國家にも、家庭にも、父母にも、朋友にも、我の外にも、我の内にも、此御光は降らせたまふのであつた。之を拜して私共は國家を敬ふ、家庭を重んずる、父母朋友を大切にす。我の内をも尊び、我の外をも愛する。けれども是れ國家、家庭、父母、朋友、其者を大切にし、我の内外其者を重んずる

のではない。此等其者のあてにならぬのは、今迄の通りである。唯其中に閃きたまふ如来の大御光あればこそ、之を大切にするのである。ちやうど太陽の光があつて色がある。光がなければ色がないうやうに、一切眞實の價値は佛より来る。佛在まされば、世の凡てのものに價値はない。されば私共は、茲に至つて此世を重んずる、而も執着せぬ。自分を大切にす。而も自分をあてにせぬ。家庭や社會を愛する、而も家庭社會に依頼せぬ。是に於いていままでの苦惱が自から薄らいで參る。而して剛健の力自ら我に加はつて參る。佛より来る勇氣佛より降る威神力自ら我に現はれて下さる。かくて私共は眞實自在の御力の中に永遠勝利の生活を進めて參るのである。異見の徒時に此厭欣の道理を辨へず、是れ人心を弱くする者である。我等は厭離の唱道を抑へて、勝利の福音を唱へねばならぬなど、いふ者がある。けれども此等は眞實の勝利が眞實の厭離に基くものであることを知らぬ。淺見である。見よ、何處に自分の坐はつてをる疊を動かす者があるか。疊を動か

眞實の法は欣求の難と勝塔の三也

かさうと思は、自分はその壘の上を去らねばならぬ。世を動かし世に勝たうと思は、我心世を離れねばならぬ。之を爲しきらすして世にかゝはつて居て、どうして勝利を得ることができやうか。泥の中に居て動かば、泥を飛ばすに過ぎぬ。罪の世を超え、罪の世以上の座を占めて始めて、罪の世に尊嚴の勝利を得るのである。大王アソカは其布告第十に、厭離の大切なことをいひ、布告第十三に、劍を以てする征服を斥けて、教法征服の尊いことを宣へ、而して其形の上の命は僅に三十年餘の短いものであつたが、其理想を實現して、壯大な宗教的王國を打立てられました。されば眞實の厭離は、實に眞實の欣求と表裏して眞實の勝利の先驅である。眞實の大法は此厭離と欣求と勝利との三面を以て成立てる榮光の三角塔であります。此三角塔は釋尊以來巍然として動かぬ。時を経るに随つて益々其榮えを増して參つた。其榮えを望み見て、又空也の教をうけて、我が源信僧都は、又正しく此道に進み入られました。而して今や自ら之を捧げて、また之を知らぬために、喘ぎ

源信僧都の傳道

源信僧都の「往生要集」

惱める斯國の同胞に之を知らしめやうと立ち上がられたのである。一、されば僧都一代の教化、この厭欣の二字より外はありませぬ。この大義をすゝめむがために、僧都は先づ故園の母君に「勸進往生傳」を作つて、之を送らせられた。永觀元年の九月には、母君の病が危篤であることを聞かれ、急ぎ歸省して、懇に往生の道を語り、香湯を以て病室を洗ひ、自ら新な淨衣を母君に着せて、靜に母君と共に御名を唱へつゝ、厚く其逝去を送られました。さきに僧都が入道の折は、母君の手にて新な衣を着せられ、母君の手より授けられた御經を受けて、向上の道に進まれた。今母君が往生の折には、母君は僧都の手にて同じく新な衣を着せられ、僧都の口より唱へらるゝ御名をうけて、光明の御國に昇られた。宿縁洵に不可思議であると思ひます。それより僧都は再び横川に歸つて、翌年十一月より筆を起し、其翌年即ち寛和元年の四月までかゝつて、修道の指針たるべき聖教を著はされました。「往生要集」三卷は即ち是であります。門を分つこと、凡て十。諸經論を引くこと七十

五部、廣く一代の遺教を開いて、諸經の讀したまふ所多く彌陀に在り、釋尊の本意一切佛敎の中樞、全く此念佛の一道に在ることを明されたのであります。其組立は厭欣の本旨に本づいて、初に私共の穢境の厭離すべきを教へ、次に如來の安養淨土の欣求すべきを示されました。而して卷頭往生極樂の敎行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざる者ぞと宣言し、中頃には、往生の業は念佛を本と爲すと垂示し、次に極重の惡人には、他の方便なし、唯彌陀を稱じて極樂に生まるゝを得と指揮し、終に當に知るべし、勝を生ずるも亦是れ結縁なるを。我若し道を得ば、願はくば彼を引攝し、彼若し道を得ば、願はくば我を引攝し、乃菩提に至るまで互に師弟と爲らむと結んで、其一卷の大義を明にせられました。昔藤原兼實は、此卷頭の文を讀み上げらるゝのを聞く毎に、いつも感涙に咽ばれたといふことであるが、兼實のみならず、眞繁に此の聖敎に對ふ者は、誰も其奥深い説明と懇篤な指教とに感せずにはをられませぬ。後僧部西海に行脚なされた處、偶々宋人周文徳の來朝し

た折であつた故、此聖敎を文徳に贈られた。文徳深く喜んで之を天台の國清寺に納めた。宋人いたく僧部の徳に歸して、東の方を拜し、源信如來と稱へたと申すことである。太宗皇帝なども亦之を讀んで僧部の徳を慕ひ、當時彼地に居られた僧部の弟子寂照に請うて、僧部の畫像を受け、是と彼の聖敎とを常に大切に居られたとのことである。この聖敎がどのやうに廣く世の中に傳はつたかは、之で察することができます。

一二、其後僧部は猶多くの著書をなされた。其部數凡てにて七十にも上り、卷數は百五十卷にも及びました。而も研修少しも怠らず、長保二年八月、僧部五十九歳の時、寂照が宋に趣くについて、色々の教義を擧げて、彼國なる四明の知禮に尋ねられた。其篇志驚くべきではありませぬか。而して其間には、折々山を下つて、道を四方に傳へられた。正暦の頃には、越前に參られて、宋の朱仁聰に會はれたこともある。其折仁聰は、僧部の博識に驚いて、師の膺は大藏經の函であるというて稱

源信僧都
の晩年

嘆した。けれども往生の本業としては此博識を加へたまはぬ僧都は唯他力念佛の一法を採つて之を傳へられた。そこで多くの武人文士之に歸する者が少なからぬことであつた。平維茂源満仲など皆僧都の前に於いて其罪を悔いたる者であつた。僧都は此等の者を集めて折々修道の儀典を行はれた。迎接會といふは實に僧都の創められた所である。其傍又多くの佛像を刻み或は畫き又和歌を賦して其胸底の神韻を文字色彩に託して現はされました。今日私共は色々の歌集を編き又多くの古精舎に詣て僧都の遺された此尊い遺身を拜することができます。今此偈に源信廣く一代の教を開いて偏に安養に歸して一切を勸めたまふと申されたのは此故であります。

一三 かやうに僧都は釋尊一代の教門より唯念佛の一法をとり之を本として様々の方面に其麗はしい光を示されましたが寛仁元年遂に病に罹られ六月の初には餘程危篤であつたが七八日の頃になつて病苦俄に去つて平日と少しも異らぬ。そこで楞嚴院に居る多くの人

原信僧都
が後代に
及ぼされ
たる影響

々を呼び集めて今生の面會は唯今日だけである若し往生の大事について疑があるならば直に之を尋ねよと申されたが多くの者は胸が迫つてたやすく尋ねることができぬ。且つ問ひ且つ泣くといふ有様であつた。既にして御息がだん／＼迫つて参つた故獨り上足の弟子を留めて他の者は去らしめ靜に御名を唱へて其平生絶えず願ひ求めさせられた淨土に詣でられました。丁度之が其月十日の寅の時でありました。齡は正に七十六歳であらせられた。

一四 かやうにして一度明にせられた厭欣の大義はもう消え去るといふことはない。管に消え失せぬのみではないちやうど横川の谿より流れ出づる谷水が愈々降つて益々其流を大きくするやうに斯大義の流は僧都滅後漸く日本の人心に注がれて茲に活き／＼した眞生命となり終に百年餘を経て大なる光を斯國の心靈界に漲らすやうになりました。嗚呼眞實の厭欣は竟に眞實の勝利でありました。

(二下) 教義上の指導

専雑執心判淺深 報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛 我亦在彼攝取中

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

【讀方】 専雑の執心に淺深を判し、報化の二土、正しく辨立したまひ、極重の惡人、たゞ佛を稱ふれば、我亦彼の攝取の中に在り、煩惱障を障へて見たてまつらすと雖も、大悲ものうきことなく常に我を照したまふとのたまへり、

【字義】 一。執心とは、心に執り持つてなること。其執心に二つあつて、専ら念佛の一行を修めて之を執持するのと、他の雑多の行を修めて之を執持するのがある。前のを専の執心、後のを雜の執心といふ。

二。報化二土とは報土化土のことであつて、化土とは、因縁に報うて現はれたる眞實の報土の中に於いて、一時、衆生の機縁に應じて化現せる國土である。

【大意】 深信僧都は、専修の執心は深くして、雜修の執心は淺いことを判す。

執心の字

報化二土の名義

其雜修淺心の者は化土に生まれ、専修深心の者は報土に生まれ、道理を辨別し成立し、其上、極重の惡人も、唯御名を信じて稱ふれば、我亦多くの善者と共に攝取の御光の中になる。煩惱は我眼をさへて其ために之を見たてまつることとはできれども、大悲の御心は、少しも倦みたまはずして、常に我を照し護りたまふと仰せられた。

【文科】 「往生要集」によつて、第六願の教義上の指導を宣たまふ一節である。

一。眞實の厭離は眞實の勝利の先驅である。此法則は千古少しも變はりませぬ。私共苟くも罪の世に勝ち罪の我を鎮めやうと思ふならば是非とも此法則に順つて此等を厭離せねばならぬ。厭離の中に自在の力が得らるゝのであります。

二。畏くも釋尊は之が明證である。國も位も打捨て遂には自分の修行をも頼みにせず、苦行林を去つて唯一すぢに大道のみを尋ねさせられた故遂に菩提樹下の曉に之を得たまうてベナレスへの御途で少年ラバカがなせそのやうにあなたの御容は静かで御眼は清らかに輝

釋尊の及びの生活勝厭

眞實の勝厭及びの勝厭

きたまふのであるかと御尋致した時其譯は迷の因であつた我執を離れて其代に眞の道が我胸に現はれたゆゑである我は今より暗に覆はれてをる人々に光を與へ其人々に不滅の門を開くために此世に正法の國を立てやうと望んでをる我は時那である勝利者であると答へさせられた。此御答は詐でなかつた。其後ガヤの菩提樹は幾度も代が更はりカピラヴストウの都は情深い母が健かな兒を生んで産後の惱に間もなく果敢なくなつたやうに幾程もなく歴史の上から消え去つたけれども釋尊の一たび開かせられた正法の國は今猶巍然として微塵も動かす多くの衆生は十方より之に向つて進んでをる。劫末の時大火が此世界を焼き盡くすやうなことがあつても此尊い靈の國のみはとはに安らかであつて天人常に充滿し釋尊は嚴に衆僧と共に本佛の御光を捧げて長へに茲に臨ませられてある。實に一切を打捨てたまうた釋尊は一切に打勝ちたまうた御方であつた。古來幾千萬の先進は皆此後を追はせられた。今源信僧都も其一人であつた。今日の

私共亦之に後れず丁度徳川家康が厭離穢土欣求淨土の文字を記した旗を押立て、戰場に奮闘致したやうに私共も其後について奮進致さねばなりません。

三、けれども人或は此處で稍ためらふかもしれぬ。其故は「自分はたとひ罪の子であつても是れ今までの我が唯一の中心である、此世はたとひ迷の境であつても是れ今までの我が唯一の住家である、我として我唯一の中心を捨て、我唯一の住家を離るゝといふこと、之は決して出来得ることではないと思はるゝ故である。かやうな考をつかむでをる者は、まだ道に遠い者である。成程たい捨てよといふならば、仲々すてらるゝものではない。けれども今は唯すてよではない、此をすてて後取るべき他のものは既に私共のために私共の前に具へられてある。而もそれが我手に在る者よりは限りなく勝れてをるのである。私共は罪の子たる我の代りに佛の子たる我を得るのである。「煩惱の家たる穢土の代りに如來の家たる淨土を得るのである。前の劣れる

を抛つて後の勝れたるを取る決してむづかしいことではない。愚かな稚兒は泥土の穢いのを辨へずそれを舐んでをる。唯それをすてよというても容易に承知をせぬ。けれども一度母の乳房を見つけた時はどの稚兒か泥土をすて、乳房に飛びつかぬ者があらう。之は別に強いてするのではない、唯すてすにをられず飛びつかずにをられぬのである。私共は今斯道の上の稚兒である。初めは自分と此世との泥のやうであるのを知らなかつた。次には之を知つて而も之を離るゝことができなかつた。然るに今や圖らずも我を呼ばせたまふ御親の御名が我に聞こえた。仰いで其御名の來らせられた方を望めば、そこに我眞實の救の御親が立たせられてある。其大靈の御胸には慈悲の御乳が溢れさせられてある。私共どうして此を抛つて彼に縋らずにをられやうか。是れ別に強いてするのではない、如來を望み其御國を仰ぐ時我知らず斯くなるのである。それ故穢土の厭離はそれのみでは之ほどむづかしいことではない。けれども淨土の欣求に伴ふ時又之

ほどたやすいことはありません。

四 されば先づ如來を念せよ、其御國を求めよ。何よりも先に之を念せよ、之を求めよ。殊に側目ふらず唯一すちに之を念せよ、之を求めよ。こゝに眞實の厭離ができ随つて眞實の勝利が得られ又随つて眞實の榮えが私共に與へらるゝのである。然るに世には佛を念すと申しながら、一すちに念せぬ者がある。佛の御國を求むといひながら眞直に之を求めぬ者がある。此等の人では、まだ自力我慢の宿習が根切をされて居らぬ。それ故まだ一面では全く自分を見切ることができぬと共に、一面では全く己を佛の御方に託し奉ることができぬ。即ち自分については慢心と佛については疑惑とが表裏して微かなやうで而も強く猶其人の胸に残つてをる。そのため、どうしても自分の計度を眼鏡にして佛を望み、之を踏石にして其御國に昇らうと努める。然るに此眼鏡は極めて曇つて居て、而も其度が變はりづめである。とても眞の御相を望むことができぬ。又其踏石は小さく且つ轉り易くあつ

て暫も落付かぬ。それ故丁度、パベルの塔のやうに、いかに積んでも目的の天に届かず、賽の河原の石積みのやうに、積みば壊れ積みば壊れて出来上ることがない。けれども慢心の消え失せぬ斯道の小兒は、此徒らな石積みに氣をとられてをる。曇つて而も凸凹常ない眼鏡の上の御相は、是れ單に此上にのみ化現した化身の假の相であり、其御國の風光も亦化土の假の風光であることを忘れて之を眞のものとして誤り之を認め得たのを自分の自慢としてをる。殊に今迄永い間佛と其御國の些の影さへ望むことができなかったのに、縦しおぼろげでも、今はとにかく之を感ずることができた故心中の喜は譬へがたい程である。恰ら「法華經」の御話にある旅路に勞れた旅人が、辰氣樓のやうな化城を眞の城と思ふやうに、一時茲に少からぬ安らかさを夢みることもできる。けれども誤はどうしても誤である。夢は、どこまでも夢である。私共は此化城に在つて心底に本當の満足を得ることができぬ。佛を變はり動くやうに拜んでは、我心亦變はり動かすにはをられぬ。御國

を幻のやうに望んでは、我心亦幻のやうに曇らすにはをられぬ。かくて何となう飽き足らぬ思が、薄紙のやうに我心の奥底を蔽ひ惱まして居る。そこで之を癒すために、時として忘るゝために自ら高ぶり佛を疑ふ此人は、又様々に細工して、美しいやうな詩想を以て、我思を彩り或は奥深いやうな哲理を組立て、我考に價をつけ、それで猶足らず、時に一時の熱心を煽り立て、倫理道德、新稱名色々の修行を強いて、それで以て我心を固めやうとする。けれども如何に黄金であつても、自分を縛つてをる繩は、我が樂の種とはならぬ。縦し七寶の宮殿であつても、それが牢獄であるならば、我に満足を與へぬ。此想像窟窟又は修行たとひどのやうに立派であつても、永く自分を繋縛して參つた我慢の現はれた影に過ぎぬもの、どうして之が眞實の満足と與へやうか。薄紙は、やはり元の通りである。とれさうであつて、とれぬ。そのため宛ら花に含まれてをるやうに、又母の胎に包まれてをるやうに、爽かな自由の空氣を吸ふこともできず、清らかな大覺の光明に觸るゝこともでき

佛慢界、
疑城、胎
宮、七寶
の牢獄

邊地
報中の化

ぬ。此時の細かて而も強い惱み、いかに之を表はすべきか殆ど其語を見出すことができぬ。是れ何れ他人のことでない誰も大抵一度は此境を通るのである。是れ道に志して向上の歩は餘程進みながらも、ただ我慢の心全くすたらす、疑惑の思全く消えぬため心亂れに亂れて徒らな雜行雜修の中に迷ひ込む者の歩み入る所の心靈上の一境界である。即ち是れ佛慢界である。疑城である。胎宮である。七寶の牢獄である。さらば此境は全く佛の御國と離れてをるものであらうか。いや、さうではない。若しさうならばたとひおぼろげでも佛を拜み又其國を望むことはできぬ。されば是れ佛の御國ではあるけれども併し佛の御膝下ではない。之を去ること、また遠い邊地である。即ち眞實救済の大願によつて報ひ現れた眞實報身の佛の在ます眞實報土の中にありながら、それを拜することができず、眞實の大覺と無信との中間にさまようてをる化土である。多くの人は此中に止まつて進む者が少い。億千萬の中時に一人あつて、能く眞の御國に生まるゝことがあると示

化土の脱

されてある。私共は奮つて此少數の中に入らねばなりませぬ。御親は私共を待ちたまふ。私共何の暇があつて、路傍の草花に遊んで居て宜しからうか。

五 さらば、どうしたならば、此化土を脱るゝことができるか。外ではない、化土に迷ふ因をすつるのである。化土に迷ふ因とは何であるか。雜修である。想像、理窟、道徳、修行、色々のものを雜え修めて、それをたよりにせやうとする計度である。即ち力味心の我慢である。この力味心が今までの我の中心である。私共は之を去らねばならぬ。我を厭ひ離るゝといふは正に此心を厭ひ離るゝのである。自力をすつるといふは、此我慢のないやうになつたのである。有限の數はいかに集めても無限にはならぬ。パベルの塔は終に天に届かなかつた。惱の多かつた化土の經驗により、愈々我慢の甲斐なきことを知り、佛智の疑ふに疑はれぬことを覺り、其正しくない眼鏡を抛つて、このまゝ、如來の御光を仰ぎ、其轉り易い小さな踏石を蹴倒して、唯佛と管願の綱に縋るとき、

私共はすぐに化土の城壁を脱るゝことができるのである。何故かといへば此御光の御旨は深い。私共の計度の如き淺はかなものでない。茲に無盡の生命がある。此御綱は強い。私共の力味心のやうな弱いものではない。茲に無窮の靈能がある。此深い生命を享け此強い靈能に引きとられて私共どうして眞實に生き眞實に榮えずにをられやうか。さきの薄紙のやうな櫛は我知らぬ間に消え去つて自由靈活の氣我中に動いて眞實報身の御相我心に感せられ眞實報土の御趣我心にあらはれて中心恰も海濤三萬里の静夜月明のうちに錫を飛ばして天風を下るやうな思の催さるゝことがある。是に於いて我はもはや邊地の胡ではない無量光明の報土の市民である。宿習深いために此光榮を今直に我上に常に完く現はし出だすことはできぬそれは未來の世に却せねばならぬ而も私共は今や必ず之を期することのできる身の上となつて其上此光榮のありさまを胸の中に味ふことができる何たる幸であるか。而して是れ専ら如來の御力を執持する深い信心

の中を得らるゝのである。されば源信僧都は懇に専ら御力を執持する心と自力を雜へてをる心との深い淺いを判ち示し之によつて得らるゝ結果に報化二土の別ある道理を正しく辨へ立て、前を勸め後を誠めさせられた。而して是れ本は「大經」により近くは懐感の「群疑論」によつて得られたる道理でありました。私共は此指圖によつて速に此報土の市民となりこの尊い仕合をいたゞくやうにならねばなりません。

六、かくいふと我同胞の中にさればとて我心があまり淺ましければと嘆く者があるかも知れぬ。けれども之は如來の子とさせていただいた私共の口にすべき語ではない。本と如來は何のために現れさせられたか。其御圖は何のために建てさせられたか。心の清き者のためでなく志の強い者のためでない。一に罪惡の泥深い底無沼に沈んで力弱く志薄く之を出でやうと思ひつゝ出で去ることができずもがけばもかく程沈んで行くもがくれば猶更沈んで行つて今にも無窮

の暗黒に落ち行かねばならぬ此自分のためではないか。私共の罪障の深いことは今に始まつたことではない。無始以來如來の夙くに知らしめす所である。之を知らしめせばこそ、如來は我に其御名を傳へ其御國を我がために莊嚴したまふのである。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をばなることあるべからざるをわはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。「歎異縁」。

されば如來の正しき御相手は、一に此悪人である。善人でない徳者でない、義を知らず、義を行ふことのできぬ此罪惡の自分である。如來の煥爛たる光明の御淨土は、只々此自分ながら戰慄する程の罪人のために建設せられたものである。されば此世に在つて最も鄙い自分は、如來によつて其御國では最も大切な者である。人の世に於いては露だも價のない私共は、如來の御蔭によつて、斯御國の主である。善人徳者聖賢菩薩此方々は皆私共の接伴である。それ故若し此罪人がなかつ

たならば、御國は何の意義をも有したまはぬ空虛である。此罪人が生まるゝので、始めて如來の御國は意義がある空虛でない。是に於いて如來が其御國を建てさせられた御本意は完うせらるゝのである。此故に今は、いかに罪惡深くとも私共の遠慮して居らるゝ時でない。この場合に於ける遠慮は、やはり一つの疑惑である。驕慢である。されば罪惡深ければ深い程愈々益々私共は遠慮心をすて、力味心を離れて偏に御名の御力に絶らねばならぬ。一度之に絶る。御親の大慈我心に閃き其眞實の大靈我心に現はる。之を感じ之を仰いで、どうして其御名を呼び奉らずに居られやうか。南無阿彌陀佛是れ永劫の間遇ひ奉らなかつた唯一眞實の大御親の御心に私共が觸れ奉つた時の最初の語であります。

七、此南無阿彌陀佛。その音は少い、その過ぎたまふ唇は汚れて居る。けれども忘れてはならぬ、是れ正に如來の大慈悲の塊である。而して我信心も偏に此御名によつて與へられたものである。されば此御

名は實に是れ如來及び其大なる淨土と小なる我とを結びつけたまふ
 靈の管である。この靈の管によつて如來及び其御國の靈徳は我心に
 降らせられて野火の枯草を焼くやうに我が今迄もちあぐんだ疑惑迷
 妄の雜草を焼き拂ひたまふのである。而して火が自分に近づく凡て
 の物を自分と同じものにするると等しく我胸に繁り合つた疑惑の草は
 此御名の靈火に焼かれて却つて靈覺の徳を以て燃ゆるのである。我
 心に亂れ生じた迷妄の林は此六字の靈火に觸れて反つて確信の色を
 以て燃え上るのである。其他煩悶は之がために平安と變り、痛苦は之
 がために歡喜と轉じ泣けるはほゝるみ怒れるは静まり弱きは勇み倒
 れたるは起ち濁れるは清められ過まれるは改められて心靈の天地唯
 同一御名の靈火のみ餘々と燃えたまふのである。而も是れ單に自分
 一人の上のことではない。此御名の傳はる處何人も永く邪惡の刃を
 以て之に逆ふことはできぬ。争へる者茲に和ぎ叫んだ者茲に歌うて
 麗はしい昌泰の光のみ此御名の御力の動く處にひろがり行くのであ

る。それ故一聲一聲の念佛は、一聲一聲に光を自分及び他人に加ふる
 のである。一念一念に我天地を莊嚴し行くのである。嗚呼此尊き御
 徳を具へたまふ御名が此汚れた私共の唇よりあらはれたまふといふ
 ことは私共にとつて此上もない譽れではないか。常に人を罵り友を
 晒ひ穢をいひ罪を語る此口が今や此尊き御名の聖壇となつたといふ
 ことは私共にとつて何たる仕合であらうか。世の未だ此仕合を得ぬ
 友は來つて速に之を受けよ。既に得た者は愈々益々此御名を念せよ。
 行住坐臥をえらばず時處諸縁をさらはず男女貴賤悉く共に普く此御
 名を唱へよ。かくて此御名をして竟には萬國に普くゆきわたらしめ
 この火を以て一切の迷を焼きこの響を以て天と地とをも動かしめよ。
 今此偈に「極重の惡人唯佛を稱へよ」と仰せられたのは此故である。此
 「極重の惡人」といへる名を眞實に我が名ぞと受くることのできる者は
 此信心及び稱名の御旨を味ふことのできる人であります。

八、されども私共は此御名を稱ふる時之を以て決して自分の力と

思うてはなりませぬ。花のさくのは春の光につままれて居る故である。念佛の花が我心に又我唇に開くのは決して自分の力ではない、一に攝取して捨てたまはぬ大慈の御光が常に我を護らせたまふ故である。私共は多くの煩惱にさへられてをる。そのために我が肉の眼は之を拜むことができぬ。又我心も絶えず之を念ずることができぬ。けれども盲たる兒の上には殊に親の慈悲が加へらるゝと同じく如来は此眼の暗みて御相を拜むことのできぬ私共の上に殊に厚き御照護を加へさせたまふのである。

煩惱にまなきさへられて、攝取の光明みされども、

大悲のうきことなくて、つれに我身をてらすなり。「和讃」

それ故此御光こそは實に私共の家である歸處である。人生の沙漠のオアシスである。親不知の難處の處である。我如来を捨てむとするも如来我を捨てたまはぬのである。されば私共どうぞ獨を慎みたい。出来ぬながらも獨を慎みたい。又どうぞ獨りの中にも樂を得て参りた

い。人皆我を捨て天下皆我を知らぬも、怨むことなく憚ることなく常に我に在ます御親に憑つて安んじて参りたい。陋巷にあつて人は其愛にたへぬとも、自分は御光の御照らしを喜んで其樂を改めまい。病床にあつて人は人情の薄きを怨むも、自分は此御力の御護りを謝しつゝ、其中に慰んで参らう。而して又金殿玉樓の中に住むやうになれば人は其歡樂に溢るゝけれども私共はどうぞ其中に大御心を畏れては、謹みたしなんで参らう。かくて零落の中に不如意の間に迫害の下に寂寥のなかに唯此御光をたのんで勇んで進まう。好運の中に得意の間に聲譽の下に喝采のなかに唯此御親を忘れず氣をつけて参らう。而して愈々死の門が我を迎へて開かるゝ時かよわき私共はやはり怖れ戦くであらうけれども、攝取の御光は私共が怖れ戦く程益々固く私共を抱かせたまうて私共を新たな光の門に導きたまふのである。是に於いて弱い私共も自ら強く、恐の多い私共も自ら安らかに死の門を通つて人も我も永久の光に入ることが出来る。嗚呼かやうな仕合は、

信念の眞否

たゞ古の聖賢のみの享けたまふものであらうと思つたのに圖らざり
 き此罪惡の私の上に亦降されたのである。我も亦攝受の中に在り煩
 惱眼をさへて見たてまつらすと雖も大悲ものうきことなく常に我を
 照したまふと仰せられたのは此いはれを示したまふものであります
 九、されば源信僧都一代の指導は主として専雜二種の信心の淺深
 を判つて私共をして化士の果を去つて報士の果に向はしめ長へに大
 悲攝取の照護を喜ばしめたいより外はありませぬ。實に雜れると雜
 らないとは信仰の眞否を分つ大切の標準である。金剛石の眞否を分
 つには、一つの黒點を透かし見てそれが唯一つに見ゆるのを眞とし亂
 れて見ゆるのを人造のものとする。或人は申した。私共が我信心を
 通して唯一の如來を見たてまつる時其佛心が常に唯一の御慈悲とし
 て我心に映らせたまふ時その信心は眞のものである。若しさなくし
 て其御心が慈悲である如く又ない如く救はるゝやうで又救はれぬや
 うで色々混雜して映るならばその信心は眞のものでない自分細工

生命は生せられたるに非ず
 自然にあ

軍の名は進
 軍の歌は進
 曲也

のものである。自分細工のものには生命がない。生命は生せられた
 者にある。それ故生命ある眞の信心はつくつたものでなく細工した
 ものでなく生せられたものであり與へられたものでなければなりま
 せぬ。私共は源信僧都の指導によつて此眞實の信心をいたゞき此信
 念よりあらはれ來る御名の御聲に勵まされて今後の生活を進め行か
 ねばなりません。誠に念佛は我生活の勞作に於ける掛聲である。進軍
 の歌である。而して此音頭は此世に於いては二千四百年の昔王舎城
 の宮中に於いて釋尊によつて發せられ傳はり傳はつて今近くは源信
 僧都によつて發せられてある。私共願はくば共に僧都について此尊
 い南無阿彌陀佛の曲を歌ひ上は之に依つて我大慈の如來を讃揚し下
 は之によつて我内外の敵を破つて高上の靈氣を此世と我上とにいた
 ゞきたいと存じます。
 一〇、かくて南無阿彌陀佛の稱名は進軍の歌であつて又凱旋の曲
 であります。

第十六章 吉水の聖人

(上) 人格上の指導

本師源空明佛教 憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州 選擇本願弘惡世

教證の字

【讀方】本師源空 佛教に明にして、善惡の凡夫人を憐愍し、眞宗の教證を片州に興し、選擇の本願を惡世に弘めたまへり。

【字義】教證とは、教と其教を信して得らるべき證の證とをいふのである。

【大意】源空聖人は明に佛教を究めて、善惡一切の凡夫をあはれみ、この片よれる日本の國に眞宗の教を興し、如來の選ばせたまへる本願の旨を、この卯の世に弘めさせられた。

【文科】第七祖の生涯を宣べたまふ一節である。

一、源信僧都かくれたまひてより百十六年の後崇徳天皇の長承二

源空聖人の誕生

年四月七日源空聖人斯國に出で、私共のために第七の指導者となつて下されました。

源空聖人の父君

二、此頃は正に王朝の末であつて世は追々亂れ始め、わけて田舎は朝廷の威令が行き届かぬため、人々互に争うて何處も物騒がしい時節でありました。聖人は其間に美作の稻岡の村なる漆間時國の家に生まれさせられた。初めは兩親の養育の下に麗はしく生ひ立たれた處、聖人九歳の春父君は僅かの怨によつて、圖らずも村吏源定明のために襲はれた。其折聖人は母上に抱かれて竹藪の中に避けて居られたが、小さい矢を以て敵を射られた。其矢が敵の眼の間に中つたため、敵はどこともなく逃げうせた。けれども父は深い傷をうけて、其痛益々激しく、快復の望全く絶えた故聖人を呼んでいはるゝやう、私は遠からず御身等と別れねばならぬ。されど、ゆめ／＼敵を怨んではならぬ。之は宿業の報である、若し此上に猶も怨を解かぬならば、争に争を重ねて輪回の果つることはない。凡そ命ある者は、たれも死をさらふ。我今此

吉水の聖人

疵をいたれば彼もいたむに違ひない。我今此命を惜めば他人も亦惜であらう。我身にかへて他の心を思はねばならぬ。御身成長の後は何とぞ世を去つて道を修め、自他平等の福祉を開くやうにとめよ」と、懇に遺言を致し、静に佛名を唱へながら眠るやうに終はられました。怨は怨によつて終はらず、怒まざるによつて終はるとは釋尊の聖誠である。今此聖誠の忠實な遵奉者が、美作の片山里に出でたといふことは、尊い次第ではありませぬか。この尊い遵奉者の門から迫害を怨まず、敵者を憎みたまはぬ慈悲の聖人が顯れたまうたのは、偶然のことではありませぬ。

三、さて葬の式も済んで暫く母子共に寂しき日を送られた處、其年の冬、聖人は母上の弟に當る菩提寺の觀覺について初めて佛教を學ばれた。觀覺いたく聖人の聰明に感じて、久安三年、聖人十五歳の春、聖人を伴つて叡山に登り、西塔の源光の室に送られた。其送狀に進上大聖文殊の像一體と書かれた。源光之を抜いて見られたが、像は見えぬ。

唯一人の少年が入つて来た故、いぶかしく思うて善く見らるゝ處、頭は平かで、かどがあり、眼は黄色を帯びて光がある。此非凡の相を見て、之をこそ文殊の像というたのであると察して、専ら聖人の引立に努められた。けれども間もなく、自分が此務にたへぬことを感せられて、聖人を功德院の皇圓の許に送られた。そこで聖人は皇圓の弟子となつて、其年十一月八日、壇に登り、戒を受け、一すちに斯教を學ばるゝこととなりました。

四、天台の教觀は、先づ聖人の究められた所でありました。聖人はこのために三年を費されました。其上達が著しい故、皇圓は深く喜んで行く。は聖人を一山の棟梁に進めやうと望んでをられた。けれども聖人の御心は之と異つて、父君の遺言を忘れず、夙に厭離の志に動かされて、少しも一身の顯榮を求めたまはなかつた。此心極めて固かつた故、さればとて皇圓は聖人に黒谷の叡空を訪ふやうにと勧められた。此人は固と皇圓と共に源信僧都の流を受け、殊に大原に在つて盛に念

佛を修められた良忍の弟子であつて、亦厚く念佛の道を勤め、又戒律と眞言とに通せられた高僧であつた。聖人、そこで皇圓を辭して、白雲をわけ、松徑を辿つて、此寂空の室に入られた。寂空大に喜び、其道に志されたのが、法爾自然であるといふので、法然房と名け、又源光と自分と名より一字づつをとつて、源空の名を興へられた。之が丁度、久安六年、聖人十八歳の年の九月十二日でありました。

五 世は漸く騒亂を加へて參つた。皇室にさへ反目軋轢頻に行はれて、寂山奈良の學徒は忍辱和合の法衣をたくしあげて、たえず狂ひ争うて居つた。よのつねの者ならば、血氣に煽られて、血湧き肉躍り、ともぢつとしてはをられぬ其折に、人生最高の問題に馳せたまふ聖人は、其意氣を偏に此問題の解決に注いで、靜に黒谷の松嶺に思を澄ました。益々大道の修學に進まれました。かくて六年の尙勉められたが、内心の暗黒がどうしても晴れぬ。そこで天台の教觀以外どこにか平安の道を求めたいと思ひ立たれて、保元元年即ち廿四歳の春、洛中は將に

矢叫びの巷とならうとしてをる其時に、山を下つて先づ嵯峨の清涼寺に詣で、大聖の指圖によつて、どうぞ平安を興へたまふやうにと祈り、轉じて奈良に行き、藏後を見て、唯識を學び、去つて醍醐に入り、寛雅を訪うて三論を語らひ、又仁和寺の慶雅によつて眞言を習ひ、黒谷に歸つて新に飛行の秘儀を受け、其上中川寺の實範について、律宗の奥旨を修められた。かくまで切に求められたけれども、まだ光が見つけられぬ。内心の暗は愈々其度を加ふるばかりであつた。そのため心中の苦惱漸く増して、畢には寢食さへ安からぬやうになつて參つた。

六 是に於いて聖人は熟々思はせられた。凡そ佛教多いとはいへ、詮する所、戒定慧の三學に過ぎぬ。然るに自分は戒については、また眞實に一戒だも持つことができず、定については、我心を靜むることができず、智慧については、煩瑣の分別たゞ我心を擾すのみで、眞實無漏の智劍を得ることができぬ。この智劍がなくば、どうして惡業煩惱の絆を断たうか、惡業煩惱の絆を断たすば、いかで生死の繫縛を脱るゝことができ

やう悲いかなにかにせん此三學の外に愚かな我心に相應した法門はないであらうか、かよわい我身に堪へらるゝ方法は求められぬであらうか、世に智者學者は多いけれども今は一人も之を示す者がないよし、此上は唯釋尊及び古賢の教説に尋ぬるより外はないと、かく決心せられて聖人は歎きく、黒谷の報恩蔵に入り悲みく、五千卷の大蔵を讀みたまふこと、源信僧都と同じく、五度にも及ばせられた。然るに其中に圖らずも聖人の心にとまつたのは、源信僧都の『往生要集』であつた殊に、往生極樂の教行は、濁世末代の目足なりとある序文より、往生之業念佛爲本の文に到つて、聖人は深く感ぜらるゝ所があつた。然も此書は、斯道の深旨を示すについては、道綽善導兩祖に譲つてある故、聖人は進んで善導大師の『觀經疏』を繕かれた。一たび讀んで會得ができた。再び讀んで、往生の道容易のことではないと感ぜられた。それでも、思つて三たび讀まれたる時、嗚呼、大光の加祐、大聖の指導は徒らでなかつた。一心専念彌陀名號、行住坐臥、不問時節、久近念々、不捨者、是名正定

之業、順彼佛願、故の三十四字が電のやうに聖人の眼に閃いた。此時聖人の御心の中、どのやうであつたであらうか、嗚呼、三千の戒行、百千の禪定、修められぬとて決して嘆くには及ばなかつた。五千の經卷、八萬の法藏、解せられぬとて悲むを要せなかつた。我には此如來の御名が準備せられてあつた。戒定慧三學の器でない、極樂最下の我のために、戒定慧三學以上の、極善最上の法が整へられてあつた。此御名こそは實に我が救の綱である。如來は此御名を我に與へて、之れを以て我を救はむと願はせられたのである。されば今之れを受けて、行住坐臥、時の長いと短いとにかゝはらず、一心に此御名を念じて捨つることなくば、一聲一念、皆是れ如來の本願に順うた大行である。既に此大行を行す、どうして如來が我を救ひたまはぬことがあらうか。否、此大行の我に現はるゝこと、既に是れ我が如來の救に入れる證據である。我はもはや正しく如來の御國の民と定められたのである。又何の悲み歎くべきことがあらうか。茲に思ひ到つて、聖人は始めて一條の活路を見

つけられた。今迄は四方暗黒であつて、全く咫尺さへ辨ふことができなかったのに、今や此三十四字の光によつて平かな大道が、すぐ我脚下より高く光明の都に向つて開かれてをるのを認めさせられた。既に之を認むる、萬行の小路、又何の要があるか。此等を以て罪惡の凡夫を裝ふは、恰も糞泥を飾るに過ぎぬ。茲に聖人は、斷乎として萬行の裝を抛たせられた。かくて赤裸々の愚癡の法然房十惡の法然房として立ち、畏くも此罪惡愚癡の糞泥に降らせたまへる一南無阿彌陀佛の生命を吸はせられた。是に於いて萬行を廢て、唯念佛の一法を立つる廢立の大義は、單に「觀經」の教相でない、實に善導大師の化風でない。又此大義より現れたる、往生之業念佛爲本の本旨は、單に源信僧都の宣言ではない、今は正に源空聖人の血である精神である。聖人が既往四十三年間、殊に入道以來三十四年間の眞摯なる實驗は、如來の加祐及び先聖の指導によつて、今や凝つて再び廢立の大義となり、念佛爲本の本旨となつて、茲に此聖人の新生命として、動き出づることとなつたので

ある。それ故、此後の聖人は、全く此大義の權化である。其一切の行迹は、此本旨の現れたものに過ぎぬ。聖人の生涯は、全く茲に一轉致しました。正に是れ安元元年、聖人四十三歳の春でありました。

七、今や聖人の眼には、嘆きの涙がやんで、喜の涙が溢れた。今まで悲の雲に蔽はれた聖人の心には、今や精進の光が輝いた。聖人は、毅然として黒谷の禪房に立たせられた。而して此得させられた大道を、今より廣く世に傳へやうとの望は、泉のやうに御胸の中に湧いた。なせかといへば、源信僧都以後、形相の上だけでは、念佛の道は廣く世に及んだけれども、僧都の本意は、全く没却せられた故である。人々は共に自力の我慢に迷はされて、僧都の斥けられた難行難修の弊實に陥り、或は自分細工の面倒な修行をませ、或は勝手なる煩瑣の理諍を混じて、それを斯道の本義であると誤つてをる。それ故、彼等は少しも内心の飢を癒すことができぬ。學者は學問に縛られ、徳者は道徳に縛られ、善人は善に苦められ、惡人は惡に惱まされ、善惡の凡夫人共に、我執の牢獄に幽

せられて自由の氣を吸ひ、靈活の光に觸るゝことができたぬ。然るに一方にては世は亂れて京洛は修羅の街となり、馬蹄の塵は御所の庭をも汚すといふ時人は平安の隠處を尋ねて止まぬ。然も大道の本義世に顯はれぬため、唯一の隠處たるべき斯道の門は、人々の前に閉ぢられてをる。苦のうめきは到る處に湧いて來た。永い間同じ苦にうめいて而も今は歡喜と精進とに満ちたまふ聖人之を見之を聞いて、どうして同情の思を抑へたまふことができやうか。此同情は憐愍となり、中心の確信と結びついて、遂に聖人を動かして黒谷の幽栖より出でしめ奉るやうになつた。そこで聖人は得道の後問もなく如來の冥許を受け、黒谷を辭して西山の廣谷に入り、又暫くにして其處を去り、東山の麓吉水に下つて、此處に草庵を結ばせられた。「よのなかの人のこゝろにははりけり、世をいとふとて山をいづれば」。眞實人生の苦惱を厭ひたまへばこそ、是非とも此苦惱を拂はねばならぬと思し召されて、よのつねの人と變はつて、今は山を下り、市に入りたまうたのである。此事あつ

源空聖人の立宗及
之に反對する
の依

て私共は、唯今茲に斯道の本義に遇ふことができたのである。私共は深く聖人の厚き御心に感謝せねばならぬ。而して聖人は下山の後直に普元曉の命せられた淨土宗の名を以て、其念佛爲本の本旨を最も強く最も明に宣へ傳へられました。

八 是に於いて心没き人々の非難が漸く起つて參つた。古來の諸宗何れも念佛をすゝむ、今更別に一宗を開くとは要らぬことではないかと。聖人は仰せられた。「天台宗は凡夫の向上をいふけれども、淨土往生の望を教へてをらぬ、唯識宗は淨土往生の望を教ふるけれども、聖者の外は之に進むことができぬとしてをる。其他の諸宗何れもまた明に如來の御心を覺つて、此罪惡の凡夫が彼の尊い淨土に生まるゝのであるといふことを示す者が、ない我若し別に斯宗を開かぬならば、どうして斯如來の御本意を明にすることができやうかと。益々盛に斯道を宣へさせられた。そこで世は靡然として動いた。貧富貴賤老若男女學者も武人も官吏も盜賊も、打揃うて聖人の前に參つた。中には

關東西國より斯德化を慕うて集まつた者も多く、殊に元暦文治の戦後には今まで敵對し合つた源平兩家の人、此世のはかなきに泣き我身の罪多きに悔やんで、共に相率ゐて聖人の前に跪いて、洵に世の治亂に動かず、何れにもかたよりたまはぬ聖人は、いつも凡ての人のたよる處であつた。誠に吉水禪室は、恩怨一如の理想を實現せる此世の淨土であつた。其頃或人が洛中は何處も闔戸堅固なれど、聖人の御許のみ安穩であるといふと、夢みたといふのも、偶然ではありませぬ。かくて常に集まる門人の數凡て三百八十餘人にも及んだと傳へられてある。源智聖覺辨長證空信空隆寛住蓮安樂重源蓮生及び藤原兼實盜賊耳四郎など、其中の名ある方々である。而して我聖人親鸞亦實に建仁元年の春より茲に入らせられたのである。されば吉水禪房の前つねに市をなすといふ光景であつた。源空聖人はたえず懇に此等の人々を導きたまふ其間折々宮中に入り、或は民家を訪うて、念佛の修行をすゝめられ、東大寺造營の折には、其櫓の下にて、南都の學僧を叱咤し、文治二年の秋に

は、大原の勝林院にて南都北嶺の碩學を論破せられた。そのため顯異慈圓等の人々亦聖人の教に順はれた。さきに聖人の師事せられた叡空も亦此間に聖人の弟子となられた。叡空の謙恭にして、繁實なる洵に申しやうがないと共に、聖人の道風の高いこと、亦驚くばかりではありませぬか。

九。かくまで徳化は盛に上下四方に及びましたが、其間も自行を怠りたまふことはない。木曾冠者入洛の朝だけ聖教を讀みたまはなかつたといふので、平生の御つとめが窺はるゝのであります。而も今や更に一步を進めたまふことゝなつた。それは即ち「選擇本願念佛集」の選集である。之は元久元年の春藤原兼實の請によつて、聖人が門人に筆記せしめられたもので、上下二卷、經文により釋義をひき、之に自身の御考を加へて、簡明直截に廢立の大義を示させられた。而して卷頭第一には、實に「南無阿彌陀佛」と標して、其下に「往生之業念佛爲本の八字をかゝげられた。一部十六章の文字、決して長くはない、而も一宗の成立

茲に定まつて眞實修道の者に對しては之が生命の源泉であり而して他の諸宗の徒に向つては恐るべき死刑の宣告であつた。なせかといへば之によつて罪惡の私共が進むべき道は唯一御名の不行より外はないことが最も明にせられ隨つて此不行より外の諸宗の煩瑣な談理複雑な道徳は私共に對しては皆死法であり空文に過ぎぬことが最も嚴かに言渡された故である。深き志ある人々は感謝した。誠には「希有最勝の華文、無上甚深の寶典」であると喜ばれた。けれども心淺き人々は憤激した。こは實に偏執の書である惡魔の文であると怒つた。而して今まで彼等が聖人の化導の盛大に對して懐いて居た嫉妬と自身の宗風の衰頹について感じて居た不平とは此憤怒の情と結びついて政權を借り俗威にたよつて茲に大に迫害の狼烟を擧ぐるこゝなつた。

承元の法

一〇。元久元年の冬、叡山の衆徒大に大講堂に會して念佛停止を議した。座主顯眞之について聖人の御考を尋ねられた故聖人は書を送

つて自身の所信を辯明せられた。又門人を誡めて自ら慎み妄に他法を誹らぬやうにと命せられた。然るに翌年九月興福寺の學徒亦朝廷に訴へて聖人を罰せらるゝやうにと願うた。朝廷でも容易に之を聽かれなかつた處、偶々後鳥羽上皇熊野に參詣の間に上皇の宮女二人鹿が谷の山院に詣で住蓮安樂によつて佛門に歸し復た御所にかへらぬ上皇還御あつて大に怒り直に住蓮安樂二人を斬り、それで猶足らず念佛停止の令を發して善緯性願をも殺し淨聞を備後に禪光を伯耆に好覺を伊豆に法本を佐渡に而して聖人親戀を越後國府に而して源空聖人の僧儀を奪ひ藤井元彦といふ名を以て土佐の幡多に流し奉ること定められた。正に是れ承元元年二月廿八日聖人は七十五歳の御齡でありました。

一一。藤原兼實は聖人の老體であらせらるゝを思つてわけて心配せられた。それ故強いて朝廷に請うて土佐を改めて其領地讃岐の鹽飽の莊に聖人を遷し奉ることに定められた。そこで三月十六日都を

出でさせられた。六十餘人御輿に隨うた。愈々出立の時信空ひそかに老年の御身を以て罪なきに遠く旅立ちたまふいつまた御目にかゝれるであらうか且つ此後は都に残れる者世に對して何の面目もないどうか此度の禁制を御請して共に竊に斯道を弘むるやうにしてはいかいであらうかと嘆いた。其時聖人仰せらるゝやうは同じ都にあるとも永く伴ふことはできぬ遠く遷るとも縁あらば又會ふ時があらう驛路はこれ聖者の往く處誦所は權化の住む砌古より多くの賢聖は旅にさすらひ遠く放たれたまうた決して耻づべきこともなく愁ふべきこともないまして此縁によつて邊鄙に赴いて田夫野人に斯道をすゝむることのできるのは正に是れ朝恩であるたとひ人は停めやうとしても法はとゞまらぬ佛の御力が大きく諸聖の御護が懇であるさればどうして世間の機嫌を憚つて經釋の素意をかくして宜しからうかと倉卒の際でありながら側なりし一人の御弟子に向つて尊念の義を語らせられた。すると御弟子西阿進み出で、御控になるが宜しからう

と申した。聖人は仰せられた其許は經釋を見ないのであるか。西阿申すやう經釋はさうでありませうが世間の機嫌を思ふばかりであります。すると聖人氣色をかへて我はたとひ死刑に行はるゝとも之ばかりは決してかへることはできぬと喝したまうた。かたへの人々感涙に咽ばすにはをられなかつた。

一二 まことに聖人の御眼には念佛の大道より外はなかつた。一切の事物は聖人の御心に入つて皆順に逆に唯此大行を助くるものとなつた。反抗も助縁であり迫害も恩寵であつた。外界の轉變はいかにあらうとも聖人の前途には唯此大行の大道のみ廣く開かれて聖人は之により之を修めて安らかに此道を歩みたまふのであつた。經ノ島を過ぎたまへる折は村の老若男女に大悲のめぐみを宣べさせられた。室の泊につきたまうた折は多くの遊女に矜哀の光を仰がしめられた。かくて月の二十六日鹽飽の地頭高階時遠が館につき問もなく小松の生福寺に移つてこゝを御宿と定めて斯地の人々に此大行の徳

出でさせられた。六十餘人御輿に隨うた。愈々出立の時信空ひそかに老年の御身を以て罪なきに遠く旅立ちたまふいつまた御目にかゝれるであらうか且つ此後は都に残れる者世に對して何の面目もないどうか此度の禁制を御請して共に竊に斯道を弘むるやうにしてはいかいであらうかと嘆いた。其時聖人仰せらるゝやうは同じ都にあるとも永く伴ふことはできぬ遠く遷るとも縁あらば又會ふ時があらう驛路はこれ聖者の往く處講所は権化の住む砌古より多くの賢聖は旅にさすらひ遠く放たれたまうた決して耻づべきこともなく愁ふべきこともないまして此縁によつて邊鄙に赴いて田夫野人に斯道をすゝむることのできるのは正に是れ朝恩であるたとひ人は停めやうとしても法はとゞまらぬ佛の御力が大きく諸聖の御護が懇であるさればどうして世間の機嫌を憚つて經釋の素意をかくして宜しからうかと倉卒の際でありながら側なりし一人の御弟子に向つて專念の義を語らせられた。すると御弟子西阿進み出で、御控になるが宜しからう

と申した。聖人は仰せられた其許は經釋を見ないのであるか。西阿申すやう經釋はさうでありませうが世間の機嫌を思ふばかりであります。すると聖人氣色をかへて「我はたとひ死刑に行はるゝとも之ばかりは決してかへることはできぬ」と喝したまうた。かたへの人々感涙に咽ばずにはをられなかつた。

一三、まことに聖人の御眼には念佛の不行より外はなかつた。一切の事物は聖人の御心に入つて皆順に逆に唯此大行を助くるものとなつた。反抗も助縁であり迫害も恩寵であつた。外界の轉變はいかにあらうとも聖人の前途には唯此大行の大道のみ廣く開かれて聖人は之により之を修めて安らかに此道を進みたまふのであつた。經ノ島を過ぎたまへる折は村の老若男女に大悲のめぐみを宣へさせられた。室の泊につきたまうた折は多くの遊女に矜哀の光を仰がしめられた。かくて月の二十六日鹽飽の地頭高階時遠が館につき間もなく小松の生福寺に移つて、こゝを御宿と定めて斯地の人々に此大行の徳

音を傳へられました。「阿彌陀佛といふより外はつづくにのなにはのこともあしかりぬべし」。此簡明の教に何人か胸の中の葛藤を拂はぬことがあらう。漁村の老少打連れて聖人の前に跪いたのは偶然のことではありませぬ。

一三。此年十二月八日最勝四天王院が出来上がった。そのために大赦の令が下つて聖人は召還されたまうた。けれどもまだ都に入ることを許されぬ。そこで攝津まで還り承元三年八月の頃勝尾山に入り西谷に草庵を結んで暫く茲に道を傳へさせられた處建暦元年八月歸洛の勅免があつた故其十一月勝尾山を去つて京都に入らせられた。慈圓之を聞かれて使を出し聖人を大谷の其禪房に迎へられた。聖人茲に入つて益々斯道を宣べさせられた處道俗歸依する者愈々多きを加へました。

一四。けれども御齡漸く老境に近づいて如來の御國を慕はせたまふ御思抑へさせたまふとができぬ。柴の戸にあけくれかゝる白雲を

源空聖人の歸洛

源空聖人の晩年

いつ紫の色に見なさむ。是れ此頃の御歌である。紫は曉の色である。曉の色は望の色である。人は死を萬事の終と見茲に絶滅を觀じ最後を觀じて絶望の苦にたへぬのに聖人は之を新しい生活の曉と觀じ茲に望の雲を仰がれた。而して此望の雲がなるべく早く自身を迎へんため柴の門に降り来るを待ちあこがれたまふのであつた。而して親は必ずや子の正しき求めを聽きたまふ。歸來の天命は終に聖人に降つて歸洛の後二ヶ月を経建暦二年正月二日より病に臥させられた。三日傍の人が今度必ずや往生なさるゝであらうかと問ひ奉つた處聖人は仰せられた。「我本と彼の御國にをつた故定めて今度彼國に歸るのであらうと。十一日起きて朗に御名を唱へさせられ弟子の方々に仰せられた。「佛降らせたまふ俱に念佛せよ」と。或時弟子の方が御枕邊に三尺の佛像を置きて之を拜ませたまへと申したのし聖人は空を指して「其佛の外に御佛の在ますのを其許等は拜まぬのか」と仰せられた。又外の人々が佛像の御手に絲をかけて其他の端をとりたまへとすゝ

吉水の聖人

四三九

めたのに、聖人は「我にとつては、さやうなことはいらぬ」と拒ませられた。信空、御枕邊に進んで、「古來の先徳、皆其遺跡がある。然るに師は今精舎一宇も御建立なさらぬ。御入滅の後、何處を御遺跡と致しませうか」と申した處、跡を一廟に占むれば遺法遍く及ぶことができぬ。我が一期の勸化は唯念佛の興行である。されば我遺跡は諸州に遍滿してをる。貴賤を問はず、海人漁人が苦屋までも、念佛の聲の興る處は、皆是れ我遺跡である。と仰せられた。廿三日、源智御側に進んで最後の教を請はれた。聖人自ら筆を執つて、

もろこし我朝にもろくの智者たちの、さたし申さるゝ觀念の念にもあらず、又學文をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず、たい往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申せば、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかには、別の仔細さふらはず、但三心四修、なんと申す事の候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちに、こもり候なり。此の外に與ふかき事を存せば、二尊

の御あはれみにはづれ、本願にもれ候へし。念佛を信せん人は、たとひ一代の御のりをよく、學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、厄入道の無智の輩におなじくして、智者のふるまひをせずして、只一向に念佛すべし。と書かせられた。簡明懇篤の御教道に志ある者、誰か之を讀んで感泣せぬ者があらうか。一字一句、皆是れ私共に対する聖人の厚情の結晶である。かくて愈々往生の御時に近づかせられた時、御弟子を呼んで「報恩のため」といふて、決して精舎などを建て、はならぬ志あらば群集せずして、御名を稱へよ。之が何よりの報恩である。群集は鬪諍の本である」と誠められて、終に此月の廿五日正午に念佛の御聲が絶えさせたまうた。御齡正に八十歳であらせられた。

一五 其後報恩の經營は、御弟子等、心をくだいて行はれた。其七々日の御式に唱導をせられた人は、實に巽に「淨土決疑鈔」をかいて、「選擇集」を難せられた三井の公胤であつた。敵者を憎みたまはぬ聖人の御

前には如何なる敵者も皆頭を下げねばならなかつたのであります。如來の大道は愈々多くの敵を降して聖人の逝きたまひて後益々盛に斯國に興つて参りました。

一六 嗚呼滿八十年の御生涯は一に是れ種々の御盡誠の連続であつた。茲に顧みて聖人の御一生を觀て私共は其御苦勞の一方ならぬのを認めずををられぬ。而も其間を一貫して一條の大精神が動いてをる。それは即ち廢立の本義である。この本義は珠數の絲のやうに聖人が一生の色々の御行動の珠を始終に亘つて繋いでをる。源信僧都の御旗標が厭欣の二字であつた如く聖人の御旗標は實に廢立の二字であつた。此旗標によつて聖人は向上の本行として一切の修行を廢し唯御名の大行のみを押立てたまうた。それ故聖人の教化には幽玄な道理の装もなく複雑な修行の飾もない。唯烏帽子もさざる千惡愚癡の法然房が唯一の命とする南無阿彌陀佛のみを當にむきだしに勸めさせられてある。即ち白木の念佛である。この故に曇鸞和尚の

源空聖人の精神

大法の歴史的風光

法流の域此の日本及び此の時代

御教に春の趣を見道緯善導兩祖の御導に夏の趣を感じ降つて源信僧都の化風の縹渺たる神韻に打たれて白雲黄葉の秋の容を觀じたる私共は聖人の教化に入つて花もなく葉もない寒山枯木の冬の風情を仰ぐやうな思が致します。随つて其上に凜乎たる一種嚴肅の靈氣の動きたまふを感せず居られませぬ。嗚呼此靈氣實に是れ乾坤一轉して參つた時新に又胎蕩の春風を孕み出して下さつた本である。眞宗の大教及び其證果の道は一に此本より顯はされ此靈氣より興されたのであります。

一七 日本は世界の地圖よりいへば片よつた國であると申して宜い。今の世は罪惡の滿ちてをる濁つた世の中である。而も世界の極地も地軸の端であるといふ點より世界の中樞である。淤泥の沼は蓮の花其中に開く時又美しき香に包まる。今や宇宙人生の唯一の中心たる大行の靈軸聖人によつて斯國に興され大行の靈なる花聖人によつて斯國に開き出でたるがため地圖上の片州たる斯國は心靈の上に

於いて、萬國の中心である。種々の罪惡の淤泥は相變らず、充ち満ちて居ながら、而も清淨高潔の香は其上を蔽うて居る。而して其基づく所は、一に聖人の教化によるのである。聖人は實に如來の大法に明かにして、善惡の凡夫人を憐愍し、眞宗の教證を片州に興し、選擇の本願を惡世に弘めて、之によつて私共の救の道を開いて下さつたと共に、辱くも此片州此惡世の上に、尊嚴の光榮を與へて下さつたのであります。

(下) 教義上の指導

還來生死輪轉家、決以疑情爲所止、速入寂靜無爲樂、必以信心爲能入。

【讀方】生死輪轉の家に還來することは、決するに疑情を以て所止とし、速に寂靜無爲のみやこに入ることには、必ず信心を以て能入とすとのたまへり。
【字義】一。生死輪轉の家とは、幾度も生死を繰返して、車の輪の轉するやう

生死輪轉家の名義

所止の字義無爲の字

能入の字義

「選擇集」の中心

に、窮なく迷ひさまようてなる私共の境遇をいふのである。

二。所止とは、止まり所、引繋り處といふ意。

三。無爲とは、爲とは凡夫のほからひないふ、凡夫のほからひのない自然のことを無爲といふ。如來の淨土は自然である。隨つて常住である。それ故、人間のほからひによつて作されてなることのやうに變りやすくない。そのために茲に靜かな眞實の樂がある。故に「涅槃經」には、涅槃について常樂我淨の四徳をあげさせられてある。その境界を、寂靜無爲のみやここと仰せらるゝのである。

四。能入とは、入ることのできる因といふ意。

【大意】私共が迷のまにかへるのには、確に疑に繋がれてなる故であつて、早く涅槃のみやこに入るのには、信心の切符がなければなりません。

【文科】「選擇集」部の中心は、其三心章である。其章の末に、「當に知るべし、生死の家には疑を以て所止となし、涅槃の城には、信を以て能入となす」と仰せられてある。この御詔が、第七祖聖人の御本意である故、之によつて今聖人一代の教化の精神を示し、又然れば今までの「依釋分」の御意を結んで、信をすゝめ、疑を滅めたまふのであります。

吉水の聖人

一。南無阿彌陀佛 往生之業念佛爲本。このはつきりした十四字は實に源空聖人の信念の全體であつて又斯道の眞髓も之より外はありませぬ。

二。斯道は他の救のやうに弱くはかなく又缺陷の多い歴史上の人物を基と致しませぬ。又冷かたで且つ觀じ難い空理を本と致しませぬ。事に偏らず理に限られず人格でなく非人格でなくそのやうな煩はしく又狭い範疇の中に入れ得らるゝものでなく高く此等の凡てを越えて而も圓かに此等の諸徳を具へ不思議であつて而も明白で尊くあつて而も近い此唯一實在の如來の御名に歸することを唯一の基礎と致されてあります。

名號は是れ萬徳の歸する所なり。然れば則ち彌陀一佛の右らゆる四智、三身、十力、四無畏等、一切の内證、功徳、相好、光明、說法、利生等、一切の外證、用功徳、皆悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在す。『選擇集』

如來は實に私共の愚かで且つ弱く汚れて長く解脱の路が閉ぢられて

居るのを憐んで此最上圓滿であつて而も愚な者の信じ易く弱い者の受け易い此御名を私共に下し之によつて其大御心を示して私共を其御許に救ひ上げやうと誓はせられたのである。それ故私共が佛に歸るべき門は唯此御名である。私共の絶るべき網は此御名より外はない。之こそ實に我唯一の光力命であつて私共の觀することのできる最高の實在私共の拜むことのできる至上の本尊であります。斯本尊の御力によつて其御光に生まれ其御心を覺り其御恩を弘むる之が斯道の全體である。それ故斯道にあつては斯御名が第一の大法であり中心の大法であり又終極の大法である。源空が目には三心も南無阿彌陀佛五念も南無阿彌陀佛四修も南無阿彌陀佛始中終皆南無阿彌陀佛の御名より外はありませぬ。

三。然るに私共まだ斯道を明かに會得せぬ時は斯御名をのけて外に色々の細工をせやうとする。而して或は思ふどうぞ先づ如來の實在を確めたい其御相御位又は御國を明に究めたいと或は思ふどうぞ

先づ我志を強めたい、自分を清らかに致したいと、けれども之は共に本末を誤つてをる。若し私共にして直に如來の御相御位又は御國を確に認め得るほどの智慧があるならば、如來が私共に斯御名を與へて特に茲に救の門を開きたまふ筈はありませぬ。又私共にして自ら我志を固め、獨りにて我心を清むることができれば何のために如來は、わざ／＼此御名を成就して之を以て私共を救はうと誓ひ之をかゝげて私共を喚び寄せたまふことがあらうか。斯御名が私共に與へられたのは斯御名の外には私共の進むべき路は一條もない故である。斯御名をのけては眞實向上の理は、何も分るものでなく眞實の事眞實の行は、何もできるものではないためである。されば斯御名は一面に私共のために救の門を開かせられたのであると共に、一面に之については私共の自力の凡て間に合はぬことを示されたものである。然るに私共之を忘れて、斯御親の御名の前に在りながら之によらず、一方では恐にも自分ひとりで望み得られぬ向上を企て、一方には不遜にも御

名を離れて、猶奥深く色々の道理を探らうと試み、そのために、いつも水に漬くやうな徒らな計度に溺れ、雲を捕ふるやうな空ある戲論に耽つて、たえず苦み、たえず悩み、己を欺き、人をも欺いて、前の者は泣きつゝ、後の者は騙りつゝ、共に俱に苦惱のたえ間なき那落の邪路に急いで居る。私共は自ら畏れ自ら慎んで、此路に陥らぬやうに氣をつけねばなりません。

四 さらばどうして此路に陥らぬことができるか。外ではない、徒らな分別と空なる戲論とをすてねばなりません。此分別と戲論とは何より起るか。一に如來を疑ふより起る。この疑は何より起るか。偏に如來が我眞實の親であらせらるゝことを知らぬより起つて參る。遠きいにしへ、如來の御許に背いて、罪惡の他郷に迷うてより、茲に幾億劫私共は放浪に放浪を重ねて、自分の身の上をも忘れ、親の在ますことをさへ忘れ果てたのである。けれども親は子を忘れたまはぬ。子のあると共に、母の胸に乳の出づる如く、私共の迷ひ出づると共に、私共に

對して現はれたまへる大悲の如來は辱くも私を尋ねんがために其高御座を立たせたまひ殊に私のために光明の御國を莊嚴し茲に御身を現はし御名を示して私が無明の酒に酔ひ罪惡の夢に陥つて居る其間も倦まず疲れず永劫の間私を呼びづめに呼びたまうて私の眼覺むるのを待たせられたのである。其御心は厚く其御聲が高い。いかにしよとい私共の迷の夢も竟には少しは覺めねばならぬやうになつた。御名は幻げに我耳に響いた。けれども私共はまだそれが我御親の御名であることを知らぬ。多分世の人の案じ出したものであらう世の多くの名と同じく何の徳もない虚しき名であらうと思つて居つた。然るに我心追々に眼覺むるにつれて此時私共は始めて何となく内心が飢えて居るのに氣がついた。随つて何かを呼び何かを求めて居ることを感じて參つた。而して此要求が始めは何でもないやうであつたけれども後には漸く其度を加へて來た。そこで私共はどこにか我内心の飢を満たすものはないか何れにか我本心の要求に應ずるもの

我が唯が内
心を來
るに求む
るに唯が
他を來
るに求む
るに唯が
也。

はあるまいかと思つて財産に行き名譽に行き家族に行き師友に行き學術に行き道徳に行き時には逸樂にも行き遊興にさへ行いた。けれども一つとして我を満足さすものがない。是に於いて私共は我内心の飢は此世のものを有せぬ故ではなくて此世より上のものを有せぬ故に起つて居るものであることに氣づいた。随つて我内心の要求は財産や名譽や學問や道徳や家族や師友や逸樂や遊興やに對するものではなくて實に此等より上のものに對するものであることが分つた。即ち我本心は今や其本源の大靈にかへりたいと思つて居るのである。久しく背き奉つた御親を呼びその御目にかゝることを求めてやまぬのであることをさつた。けれどもどの路より佛に歸るべきか何處にて御親に會ふことができるかを知らぬ。この時我が今まで幻げに聞いて居つた南無阿彌陀佛の御名が正しく此御親の御名である御親に會ふべき門である本國に歸るべき道であることが教へらる。けれども長く如來を念はなかつた私共は直に之を信ずることが

できぬ。随つて此御名より外に、御親に會ひ奉る門がないとは、どうし
 ても疑はずにはをられぬ。そのため恐かにも御名の外に、又不遜にも
 御名より猶深く、苦みつゝ悶えつゝ、尋ね回らずには居られぬのである。
 迷の夢漸く覺めた者でさへ、此の如くである。まして猶ほ夢酣である
 者であつては、御親を求むる志などは少しもなく、墮落に次ぐに墮落を
 以てして、相變らず罪と苦との迷路に悩むでをる。是れ私共の多くの
 今までの經歷であります。けれども之は單に過去や現在ばかりでは
 ない、未來亦此通りである。世に不孝の罪ほど重いものはない。眞實
 大靈の御親に背いたがため、其御親の御名を疑ふがため、三世に亘つて、
 輪のめぐるやうに生死の苦の家に迷はねばならぬのである。生死輪
 轉の家に還來することは、決するに疑情を以て所止とす。永久の苦惱
 は、疑情を其止まり所として居る者の免るゝことのできぬ運命であり
 ます。而して此疑情は何に由つて起るか。佛の御教は之を以て私共
 が本來惡いためであるとは仰せられぬ。恐疑ゆゑである無明ゆゑで

佛の教の
理は同情
の教理也

一心一向

ある、智慧の光に遇はぬゆゑであると仰せらる。何といふ同情の厚い
 御語であらうか。佛の教理は同情の教理であります。
 五、疑情が既に今までの私の止まる所であつた。私共は今、斷乎
 として止まる所をかへねばなりません。緇蠻たる黄鳥は丘隅に止ま
 る。止まる所に於いて其止まる所を知る。私共、どうして止まる所をま
 ちがへて宜しからずや。人の臣となつては、敬に止まらねばならぬ。
 人の子となつては、孝に止まらねばならぬ。如來の子たる私共は是非
 とも、疑に止まらずして、信に止まらねばなりません。さらば如何にし
 てといふか。それらの心配は少しもいらぬ。今は子が親に對ふので
 ある。其間に何の面倒なこともいらぬ。唯信に止まるのである。唯
 信するのである。眞向に信する。猪のかけるが如く一心に信するの
 である。彈丸の飛ぶが如く一向に信するのである。何をそのやうに
 信するのであるか。如來の仰せをそのやうに信する。如來は何との
 たまふか。唯來れ救はむと宣ふ。南無阿彌陀佛の御名が即ち是であ

る。されば私共は、一途に此仰せを信じて唯此御名に願ふべきである。一心に一向に斯此名こそ我御親の御名であることを信じて、ひたすら斯御名を念すべきである。力が弱いか、すぐ斯御名を念する。いかに志が弱くとも、宜しきやうに私を計ひたまふ御名の御親が在まれば、何も痛むべことではないか。心が濁るか、直に斯御名を稱へる。どのやうに心が濁るとも、私を引き上げたまふ斯御名の御親が今私の上に臨ませたまへば、何も歎くべきことではないか。縦し如來の御相御位又は其御國が確められずとも、我が救の網たる斯御名が、今私の心に結びつけられ、私の唇に接したまひ、我胸は其大御心の御旨を知り得てをるなれば、何の不足があらう。現在の私共は、唯救はれさへすれば、よいではないか。今まで持ちあぐんだ此自分を御親之を引受けて下さつて、宜しやうに計つて下されば、その外に何も求むべきことはいりませぬ。まして唯救はるれば、よい志の弱いこと心の濁つて暗いことなど、悲むには及ばぬ。如來宜しきに計ひたまふと信じて、一に斯御

名を念する時、我志は自ら強められ、我心は自ら清められ、我心は自ら明るくせらるゝのである。かく私共は、求めざるに寶殿自然に至つて、内心の飢と食しさと、知らぬ間に全く癒され了るのである。その筈である。我靈は斯御名に於いて、如來の大靈と結びついたのである。幾億劫來、遠く離れて、稍心づいてよりは、慕ひに慕うてやまなかつた御親の御胸と、我胸と、此御名に於いて相觸れ合ふやうになつたもの。私共は此時に於いて、始めて永劫以來の輪轉の因を盡くして、速に寂靜無爲のみやこに向ふ身の上と定めていたしたのであります。寂靜とは、罪惡の餘が全く静まつたこと、無爲とは、小やかな爲作がなくなつて、如來の他力自然の大なる御計の行はるゝことを申すのであります。

六 嗚呼、如來の御名、是れ一つが救の門である。外に遠く一代の教をながむれば、八萬四千の路、いろ／＼に分れて、勝劣高下様々であるやうであるが、近く自分の進むべきは何れかと選んで見れば、我道は此一つである。十方法界たい私共のために、如來の選ばせたまへる此門よ

教を外の
ながむる
心迷わぬ
に内を
選ぶに
我道は
定まら
べし

「勤修御
傳」

吉永の聖人

四五六

り外はない。斯門を開くべき唯一の鍵が即ち御名に對する信心である。斯信心によつて此御名に入り茲に救の室に息ふことができる。月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人のこゝろにぞすむ。平等大慈の御光は疑ふ者の上をも信する者の上をも同じく照したまふけれどもさへられぬ光もあるをおしなべてへだてがほなる朝霞かな疑の霞で隔てゝをる者は之を望むことはできぬ唯渴仰の頭をあけて眺むる者の上にもみ輝きたまふのである。けれども之を以て自分のちからと思つてはならぬ。たやすく戸を開き得る鍵は其戸をつくつた工人のそなへたものである。月影を望むことのできるのはやはり月の光の御蔭である。威力強き大慈の御名の光は我が疑の霞を破つて辱くも此小やかな胸を尋ねて下らせたまひ茲に我信心となつて澄みわたりたまふのである。されば此信心は即ち佛心である即ち御名である。斯御名今は是まで我心を占めて居つた煩惱をおしのけて自ら我心の主とならせられたのである。煩惱を心の主として念佛を心の

「和語燈
錄」

「和語燈
錄」

客人とすることは雜毒虚假の善にて往生にはきはるゝなり。しかるに今や煩惱をば心の客人として新に此尊嚴なる主を迎へ奉るといふことは私共にとつて此の上もない仕合ではありませぬか。嗚呼今まで蕃賊の洞窟であつた私の心は今や如来の領國である。殘黨は猶ほ暴威を振はうとする。けれども無上法王の大慈の威力は常に之に克ちたまふ。私共の煩惱はいかに烈しくとも其運命は今に限られてある。而して眞寶泰平の春は其代はりに我胸に満ち度つて參るのであります。

七 かくて眞の主今こゝに定まる。私共の心はこの主の命するまゝに順うて參らねばならぬ。是れ私共の生活上の大憲である。現世の過ぐべきやうは念佛の申されんやうに過ぐべし。念佛の妨げになりぬべくは何なりともよろづを厭ひ捨てゝ是を止むべし。我が阿彌陀如来我胸に命じたまはぬことならば世はいかにほむるともそれを抛たねばならぬ。若し斯主命したまふことならば世人の機嫌は如何

吉永の聖人

四五七

にあらうともたとひ死刑に行はるともそれをば行はねばならぬ。今や我は世に順はぬ御名に順ふ。人に事へぬ佛につかへる。之がために世人の迫害非難は如何にあらうとも唯我中に御名の主を奉じてをることをも以て満足し斯主と俱に進み斯主と俱に退いて矢九飛び散る其中をも心安らかに切り抜けて参るのである。此時我御名の主どうして斯健氣な戰士を喜びたまはぬことがあらうか。攝取の大光は長へに私共を守り私共を祐け私共の向上を全うさせて下さるのであります。

八。敵に向つて馳する時は互に左右を見ず戦友を見ず一心に上官の命令のまゝに突進して顧みぬこれが即ち畢竟左右を救ひ戦友互に援け合ふことになる。とは今日の或戦路家のいふ所である。一向に如來に向ふ者は即ち如來の御力を享けて天下に働く者である。眞實昌榮の社會は一心に如來に順ふ者の集ひ成せる組合であります。

九。三千大千世界の主たる我如來十方の諸佛諸聖の本師たる我大

「あまな
高に如來
は向ふ者
は廣く天
下を救ふ
者也

の功徳を
しちたが
ら起す夕
なしく細
陀の佛智
と心しに
「安心世
定妙」

源空聖人
感謝する
「高僧和
敬」

御親は此昌榮を私共の上に與へたまふのである。我如來既に此の如くであれば斯等諸佛諸聖どうして亦私共を忘れたまふことがあらうか。斯諸佛諸聖の靈はたえず私共に來つて覺めて居る間寢て居る間たえず祐護と指導との手を加へつゝ稱讃の歌をやめたまはぬのである。昔源空聖人の靈山寺にて行道したまふ夜燈なくして光が輝いた。第五夜には勢至菩薩の御影が行道の列に加はらせられた。是れ聖人の御上にのみあることではない私共の身の上亦常に此通りである。唯煩惱のために見えぬのみである。何たる仕合せぞ。私共はこの尊き光榮を一身に荷うて讃頌の天樂を我靈にきゝつゝ歓迎の聖幡を我靈に仰ぎつゝ勇み進んで常樂の花長へに匂ふ無量光明の御淨土に向ふのであります。

一〇。此無上の光榮は正に往生之業念佛爲本の大義によつて與へらるゝ所のものである。「曠劫多生のあひだにも出離の強縁しらざりき。本師源空いまさすばこのたびむなしくすぎなまし。」我聖人親鸞

吉水の聖人
 四六〇
 は、此厚き感謝を師の聖人に獻げられました。私共も亦聖人と共に茲に伏して、此吉水の聖人の御恩に對して、深く御禮を申し上げねばなりません。

第十七章 いざいなむ

弘經大土宗師等 拯濟無邊極濁惡
 道俗時衆共同心 唯可信斯高僧說

【讚方】弘經の大土宗師等、無邊の極濁惡を極濟したまふ。道俗時衆、共に心を同じうして、唯斯高僧の説を信すべし。

【字義】一。道俗とは、道は専ら道を修めて、他の業務をやめ、偏に經釋の研究及び修行と教義の流通とにつとむるもの。即ち出家ないひ、俗は家にありて、斯道を信じながら各自の業務を執る者即ち在家ないふ。今はこれを合はせて道俗といふ。

二。時衆とは、其時其時に集ひ合ふ衆くの人々のことにて、廣く各時代の社會の人々ないふのである。
 【大意】印度、支那、日本に亘りて、多くの善知識、此世に出てまして、釋尊の經意を承け、阿彌陀如來の本願の御旨を弘め、數限りのない多くの罪惡の數へられぬ人々をばすくうて下さつた。出家たると在家たるとを問はず今いざいなむ

道俗の名
 時衆の名

いざいなむ

日の人々は、共に心を同じうして、たゞ此等の歴代の善知識の御教を信ぜればなりませぬ。

「文科」近くは全く「依釋分」を結び、遠くは一偈を結んで、重ねて信仰をすゝめたまふ一節である。

一、東方の佛國其數恒沙の如し。彼土の聖衆往いて無量壽佛に親

ゆ。南西北四維と上下と亦然り。彼土の聖衆往いて無量壽佛を禮

す。一切の聖衆各々天の妙なる華と香と衣とをもらて無量壽佛を

供養す。共に天樂を奏し、和雅の音を發し、最勝の徳を歌ひて無量壽佛を

讚す。これは釋尊が印度摩竭陀の靈鷲山の上雲のやうに集ひたまへる大衆の前で、如來の御徳をたゞへさせられた讚頌の初めの御語であります。

—「大經」

如來の御座は法界の首府也

如來の御心は心靈の大海也

如來の淨土及び一切の衆生

す。靜に之を誦する時森嚴の氣が私共を動かして参ります。

二、向に如來の御座は法界の首府である。あなたこなたに迂り曲つてをる一國の道路が皆竟に其國の首府に集まるやうに、此世に於ける色々の道理は悉く終りには、如來の大御心に歸して參るのであります。

三、向に如來の御心は心靈の大海である。をちこちの谷間より出で来る多くの河水がすべて大海に向つて注ぐやうに、十方三世の衆生の心靈は種々の處より出かけて、皆竟には如來の大御心に入り込むのであります。

四、貴き者も之に向ひ賤い者も之に向ふ。賢い人も之に入り、愚かな人も之に入る。男も女も之に集まり老ひたるも幼きも之に進む。學問の理窟に苦むだ者も之に歸し、倫理の小路に悩むだ者も之に上る。人生の旅に泣いた人も、茲に急ぎ罪惡の棘に害はれた輩も之に走る。殊に疑の暗に鎖されて、如來に逆ひ奉つた者も、茲に集ひ些も道の何たるを

いざいなむ

知らず、如來の在ますことを拒むた者さへ亦た竟には茲に來る。東より西より南より北より四維より上下より古より今より後より皆如來の賜はれる同じ御名の衣を着共に人中の花たる聖衆の肩書を以て賑はしく此中心の御座に詣づる。この大地に在る者一つとして大地の中心に引かれぬ者はない。如來を中心とせる此法界の衆生は皆竟に如來の大悲に引き寄せられて其光明の御座の下に跪き其至上の御徳をたたへ奉るに到るのであります。

五 然るに大地の中心に到つた水は其處なる永久の熱に熱せられ再び還つて地面を温める。それと同じく一たび如來の大御心に集まられたる諸の聖衆は皆茲に無始の古より燃え立つてをる大慈悲の靈火に鎔かされて悉く御慈悲の熱を受け再び元の冷えはて、をる迷の地面に向つて之を温むるに力を盡したまふのである。地中の温いのは地心の熱の通うてをるためである。世界の歴史の面に罪の霜や迷の雪が降りつもる其下より融かされて亦等しく如來の中心に流れ

入るやうになるのは全く如來の大御心を受けられた聖賢が世々引續いてあなたごなたに顯はれて其御慈悲の熱を以てこの冷えわたつた世をあたゝめたまふ故であります。

六 されば此等の聖賢の上には慈は單に此方々自身の大慈悲ではない、正に中心の如來の大慈悲の顯現であります。それ故に至上の靈が輝き無窮の力が動いてをる。中にも龍樹天親の二聖者の上に慈尊道綽善導の三祖の上に又横川の僧都と吉水の聖人との上に顯はれて下さつた此大慈悲の御光は殊に私共に明かに又強く輝きたまふのである。此方々は皆な二千四百年の前大聖釋尊として圓に此世に現はれたまうた大慈悲の御光に招かれて共に深く中心の如來に歸し、茲に於いて得られた御慈悲の光を横に當時の人心に弘めらるゝと共に又豎に後代の社會に傳へさせられた。而も其傳たへたまふや各々別異の方面より同一の大御心を説きあらはし而して同一の大御心がいかに廣く其靈能を現はしたまふかを示させられた。即ち

いなき

第一祖は難易二道現生正定報恩稱名の決判を明かにし第二祖は一心
歸命他力回向常行大悲の理義を懇に示し第三祖は往還二相信心正因
第四祖は聖淨三門三不三信を宣へ第五祖は定散二善凡夫正機光明名
號の道理第六祖は厭離欣求報化決判心光常護の奥旨を傳へさせられ
而して第七祖源空聖人は正しく之を一宗として社會の上に興し疑を
誠め信を細めて強く念佛の大義を弘めさせられた。されば如來の大
御光は直に高きより私共を導きたまふと共に又低く此等の聖賢を通
して私共を導きたまふのである。私共之を認め來つて實に大悲の矜
哀の厚いのに感せず居られませぬ。草葉の露が玉のやうに輝くの
を見させてはと思つて月を仰ぐ。若し此世の歴史に聖賢の光が輝かな
かつたならば私共永い迷のために低く此世ばかりを見て全く如來を
忘れ奉つてをる者は如來の御光の下に在りながら高く大御心の御相
を拜するやうなことはないのに罪惡の雜草亂れ生へる此世の歴史の
庭に此等の聖賢は白玉のやうに輝いて居る。之を見て私共は其光

聖賢を見
る如來の
一に踏む
路也

現聖人
の出現及
び其修進

の原づく處を尋ねずに居られぬ。そこで之を雜草に尋ぬる。されど
光は雜草より來らぬ。そこで地中に尋ぬる。されど光は地中より出
でぬ。終に天を仰ぐ。此時私共は今まで氣づかなかつた如來の大御
心が長へに高く満月のやうに輝き渡らせられてあるを拜する。而し
て之が正に聖賢の光の源であることを知り奉るのである。されば低
きに此世の聖賢を見るのは高きに此世以上の如來を拜し奉る緣であ
る。遠く代々の善知識を望むのは現に我上に臨みたまふ如來の大御
光を感ずる手係である。それ故斯道における向上は實に此等の指導
者によつて進めらるゝのである。如來の經道を弘めたまふ龍樹天親
の二大士それを取次いで下さるゝ曇鸞道綽善導源信源空等の宗師は
正に邊なき極濁極惡の海に沈んでをる澤山の私共を拯うて淨らかな
如來の御國に渡して下さるゝ如來の御使であります。
七。されば我親鸞聖人も斯道に進むに當つてこの大切な指導者を
求めさせられた。承安三年の春四月一日此世に出でたまうて後四歳

父に別れ、八歳母を送り、此世の海の波荒きを感じたまうた聖人は、どこにか平安の港を得られずにはをられぬ。そこで九歳始めて道を求め都を出で、比叡の雲を攀ち、廿年の間、自ら自分を安んずべき心靈の基を構へやうとつとめられたけれども、どうしても思ふやうにならぬ。「定水を凝すと雖も、識浪頻に動き、心月を観すと雖も、妄雲猶覆ふ。」三諦一諦の妙理を窺ふ羅洞の霞の中に、妄念の猿が荒れに荒れ、瑜伽瑜祇の観念を凝す艸庵の月の前に、迷情の魔が狂ひに狂ふ。聖人は愈々自身のかよわいことを感じたまうた。而して何處にか此かよわい者が進むことのできる道はないであらうか、之を示したまふ善知識はないであらうかと尋ねられた。かくて彼方に求め、此方に探られた結果、建仁元年廿九歳の春、聖人は圓らすも安居院の聖覺に導かれて、吉水の禪房に詣でられた。源空聖人が一宗の淵源を盡くし、大教の理致をきはめて、宣べさせられた其指導の雨は、大早の雲霓を望むやうに求めて已まれないかつた我輩人の胸の上に、浸み込ますには居られなかつた。「他方

攝生の旨趣は、立ちどころに聖人の御心に得られ、凡夫直入の真心は、圓に聖人の御胸に現れた。かくて聖人は、あまりの熱さに枯れ果てんとした草が、俄に夕の雨に生きかへつたやうに、全く新たな生命を得たまうて、こゝに新たな聖人として、御名に於ける新たな生活を進めさせらるゝやうになりました。

八、されば聖人が新生命を得て、新生活に入らせられたのは、全く吉水の聖人の上に、自身の指導者を認めさせられたためである。聖人は自ら之を打明けて居られます。

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信するほかに、別の子細なきなり。「歌興抄」

故聖人のおほせに、源空があらんところへ、ゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへ、まいるべしと思ふなり。「教持抄」

實に是れはつきりとして而も力強い告白ではありませぬか。聖人は自己全體を一法師源空の教の上に投じ了はつて願みたまはぬのである。自己永久の運命を凡て師の取次ぎたまふ道に任せて少しも意にかけたまはぬのである。師は仰せらるゝたい佛を念せよ佛は必ずたすけたまふと信じさせられた。而して之が賊であるか偽であるか聖人は毫も之を詮議なさらぬ。假に之を偽とするも全く進むべき路のない自分をそのまゝ來れ救はむと呼びたまふは辱なき極みではないか。縦ひ師が自分を欺かれたのであるとするも他人ならぬ我師により他の名でない佛の御名を以て欺かるゝことは是れ自分にとつて寧ろ名譽ではないか。ましてや斯道若し偽であつて地獄の因ならば自分は師と共に又多くの聖賢と共に地獄に落つべきである。何のくやしいことがあらうか。固とく自分は地獄より外に行場のないもの。加ふるにそれが多くの聖賢と共に往き多くの聖賢の在ます處に向ふの

であれば我が落ち行く其地獄がやはり我がためには一つの淨土ではないか。さらば此道まことならばいふまでもなく偽にてもやはり淨土に向ふ。されば眞偽いづれとするも共に淨土往生の道であるならば眞偽のはからひ今何の必要があるか。是れ實に聖人の決心であつた。此いさぎよい決心を以て師の命じたまふままに思ひ切つて直に如來の大御心に向ひたまふ。どうして如來の大御心と聖人の御心と相觸れ合はぬといふことがあらうか。如來の大御心は直に洪水のやうに聖人の御胸に漲らせられた。聖人の御胸は正しく之を受けたまうて此大御心の威力を感せられずには居られなかつた。而して此感じの中に聖人は斯大御心の空でなく幻でなく随つて斯道の虚でなく偽でない確固不動の眞實の證明を認めさせられた。斯道既に虚でなく偽でないならば斯道の本義を燈を傳ふる如く水を瀉ぐやうに世々相繼ぎたまふ聖賢の指導がどうして虚であり偽であらうか。

彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の説教虚言なるべから

いざ、いなじ

四七一

す。佛説まことにおはしまさば善導の御釋虚言したまふべからす。善導の御釋まことならば法然のおほせ、さらごとならんや。法然のおほせ、まことならば親鸞がまよすむね、またもてひなしかるべからずさふらふか。「蘇異鈔」

聖人は崇高なる自信の上に立たせられた。如來の本願のまことである如く我が説く所もまことである。如來の大道の偽でないやうに我指圖も偽でない、自分は正に如來の御代官として立つものであることを自覚なされた。この自覺の前には、どのやうな障礙も秋風の枯葉のやうに散りうせた。承元々年の法難も聖人にとつては唯其御心を觸ます縁となるのみであつた。山河百里の困難は、却つて聖人をして傳道の樂を樂ましむる本となるばかりであつた。かくて誘つた者はほめ侮つた者は敬ひ遠かつた者は近づき逆つた者は順ふやうになつて、此等の人々の隨喜渴仰の間に聖人は恰も大きな月影が衆星の間を進むやうに、越後より關東に回つて二十八年の傳道を行ひ、其間に元

仁元年五十二歳の春には常陸の稻田に在つて六軸の「御本書」をも草して大道の本體を明かにし、嘉禎元年六十三歳の秋京に歸らせられてより、二十七年の間御身は洛中の巷に清閑の生活を送りながら御心は遠近の御同朋「御同行」を忘れたまはず、常に懇篤な御消息を以て又鄭重な御著書を以て教へ諭し誠め導かせられた。其「正像末和讃」は實に八十六歳の時の御作であつて、「末燈鈔」中の第八御消息には、目もみえぬやうになつたとの御語さへもある。其御苦勞誠に恐れ入らずに居られませぬ。而して弘長二年の十一月の末より不例に渡らせられて其月の二十八日正午満九十歳の御齡を以て靜に稱名の御聲が絶えさせられた。京都大谷の祖廟石古び苦蒸して参つたけれども、廟門の松風とはに聖人の遺徳をたへて無韻の伽陀を歌ひ大訓益々世に弘められて徳光今や廣く海の外にまで溢るゝやうになつた。而して是れ一に聖人の自信と自覺との産みたまふ所である。而して此尊い自信自覺は實に實に吉水の聖人に導かれて、我聖人が直に如來より受けさせら

いざ、いなじ

四七三

れた大御心の顯現であります。聖人は御自身に此實驗がある。それ故今や親しく此實驗を提げて、此偈の最後に私共に仰せらるゝのである。「道俗時衆共に心を同じうして唯斯高僧の説を信すべし」と。嗚呼何たる簡明の御指図であらうか。而も是れ聖人の涙の御語である。私共は此御語に順うて、聖人と共に心を同じうして、源空聖人に往かねばならぬ。而して吉水の流の源たる六祖に往き、又大聖釋尊に往いて其指圖によつて直に遠に如來の大御心に入らねばなりません。聖賢を見るは、聖賢に止まるためではありません。進んで聖賢と共に直に如來に入らむためである。而して是れ又凡ての聖賢の本意であります。

九 しかし是に於いて此等の聖賢は皆遠く時を隔て處を隔てゝるではないか。どうして私共は之に接して親しく導かることができやうかと危む者があるかも知れませぬ。されど之は誤である。隔たつてをるといふは表に於いてのこと。即ち形に於いてのことであつて裏

我等直に
しつとあ
りしつとあ

において、即ち心に於いては私共は近く近く相接することができるのである。見よ地の上でこそ彼の池此の井と別れて居るけれども地の下であつては兩方の間にちやんと水道が開けてあつて水はあちこちに通うてをるではないか。時は如何に異り地は如何に離れて居ても外に於いてでなく内に於いて見よ古の此等の聖賢の心を私共は近く我が前に仰ぐことができ。それ故外より見れば幻げにしか見られぬ聖賢が内に於いて一たび隔ての幕を取除く時彼の靈と私の靈と互に相對うて私共は其教を直に我胸の上に確に感ずることができ。さればこそ第四祖は玄忠寺の古碑の前にて六十七年前に逝ける第三祖の指圖を受けられ、第七祖は黒谷の林中にて四百八十九年前に去らせられた第五祖の感化に接せられたのである。それ故私共にして、一片眞實の求道の志があるならば直に時代と國土との隙壁をくぐつて親しく諸の聖賢の手に觸れて共に如來の大御心の清泉に汲むことができるのである。殊に此等の諸の聖賢の指導は、本と釋尊御一人

いざいなむ

の御胸より流れ出たやうに今は皆親鸞聖人御一人の御胸に歸し悉く
 聖人の低くして尊い御教の中に融然として湛へられてある。三國の
 祖師悉くもおの／＼この一宗を興行すこのゆゑに愚禿すゝむる所さ
 らに私なし親鸞聖人の御教は先佛列祖の御教そのまゝである。而し
 て此教の水は今や近く私共の前に流れ來つて現に此正信偈となつて
 私共の上に至上の德音を與へて下さつてある。此德音に引き立てら
 れて入り得らるゝ光の國には古今の聖賢皆現に存らへて私共のため
 に語り私共のために教へらるゝのである。かくまで近く指導に接し
 ながら之を知らずに居て猶善知識の無いのをつぶやいてをるといふ
 ことは恐多い次第ではありませぬか。ましてや多くの同行今日の世
 に亦多くありますれば私共は此等に聽き此等に察して日に新にして
 又日に／＼新に歩を進むることに心がけねばなりませぬ。釋尊は前
 世の修行に於いて雪山の奥に在らせられた時半偈のために御命を羅
 刹に與へさせられた。善財童子は多くの善知識を歴訪してつひに不

今は塵境の時なり

思議の佛智に歸せられた。私共は一句の教を疎にしてはなりませぬ
 一人の善知識を見落してもなりませぬ。
 一〇。嗚呼、「いざいなむ。他郷には停まるべからず。つねに痛と
 共に居り惱と共に住む此の罪惡の里は決して私共の長く執着すべき
 處ではない。永劫の古より私共を忘れたまはぬ佛の大御心はいかば
 かりか私共のために痛まさせられてあるであらう。私共は早く大御
 心に歸らねばならぬ。歸省を促したまふ御使は既に幾度も／＼更なる
 一私共の宿所を訪ひたまうた。恐なる私共はその譯を知らなかつ
 た故一聲の返事だも致さなかつた。而もそれを憎ませたまはばで猶我
 門に在つて今現に我門を叩きたまふのである。つく／＼迷の旅の苦
 しさか身にしてみても之を通れやうと思へど何れに向うてよいやら少し
 も目的がつかかなかつた今之が我を招きたまふ故郷の親の御使である
 と知つてはどうして返事せずに居られやうか。我身はおちぶれてを
 る。我衣はみすばらしい。されどかやうなことなど彼是思つてをる

べき時でない。まして我大悲の御親は既に之を察して我に着すべき御名の衣我に與ふべき信念の資を備へて唯私が苦の宿を出づることだけを待たせられてある。私共は早く應へ早く起つて御使の聖賢と俱に御親の待たせたまふ光明の都に歸らねばなりません。

一。此時私共は自分の前途について色々と憂ふことはいりませぬ。此度の往生は私共にとつては初旅であれば我が前程の途がいかにか曲つてをるかには知ることはできぬ。されどそれは如何にあらうとも、とにかく幸は愈々加はるのである。樂は益々進むのである。一步一步覺の都に近づくのである。其上慈悲の御光は天に漲つてをる。恩恵の花は地に匂うてをる。斯道を温かな至徳の風に吹かれつゝ釋尊と共に歩み親鸞聖人と共に進む。其他多くの聖賢と共に行く。かくて日に近づく御佛の都のたふとさを聞きながら想ひながら又語り合ひながら喜び勇むで參る。こゝに苦は漸く減じて幸は漸く加はり行くのである。かくて此幸が益々加はつて死の門の彼方において圓滿の

絶頂に達した處即ち是れ無量光明の淨土である。如來の御國私共の本國である。諸の善者の集はせたまふ處である。常住妙樂自由清淨の四徳の圓に具はつてをる處である。而して是れ正に一切の徳の流れ出づる本源一切の徳の依つて立つ基礎又一切の徳の終に收まる極處であります。

一。大聖釋尊の此世に來らせられたのも二千年間の諸聖賢の引續き教を傳へさせられたのも殊に三國の七祖が懇に指導を加へさせられたのも而して我が聖人が其九十年の生涯を捧げて御苦勞を盡くしたまひ今此偈を以て一面佛徳をたふると共に一面私共を諭したまふのも一に是れ私共をして此淨土に向はしめたまふより外はありませぬ。産まれ出で幾くもないのに光が來れば嬰兒は直に其方に眼をむける。此天性をもつてをる私共が獨り我が心の眼を御慈悲の御光に向け奉らすにをるといふ譯はありませぬ。

第十八章 讃仰の樂堂

如來の興世にあひがたく、

諸佛の經道きゝがたし。

菩薩の勝法きくことも、

無量劫にもまれらなり。」「淨土和讃」

一、クシナガラ城外の娑羅樹園に於いて釋尊御涅槃に入らせらるゝ前親ら地上の土を少程取つて之を爪の上に置いて仰せらるゝやうは此爪の上の土が多いであらうか、十方世界の地上の土が多いであらうかと。其時年少の菩薩迦葉が御側にをられて世尊御爪の上の土は僅かであつて、とても十方世界の土の多いのに比ぶることはできませんぬと申されたれば釋尊其時迦葉に向うて善男子惡道の身を捨て、人身を受け正信を具へ正道を修め解脱を得て涅槃に入る者は爪上の土の如く少く惡趣に流轉して諸根具はらず邪見を信じ邪道を修め解脱

道縁不可思議也

「涅槃經」

を得ず涅槃に入らぬ者は十方世界の土のやうに澤山であると仰せられました。私共は此御話を承はるゝについても深く自身の仕合を慶ばすにをられませぬ。宇宙の生類は實に一切世界の土と同じく、いかほどあるか量ることができぬ。其の中で私共は今や生まれて人間に在る是れが既に唯事ではありませぬ。其上に此地球の人類其數十五億中において御慈悲の御旨を知つてをる者が、いか程あらうか私共は今や斯道に入つて、正に爪上の土の如き僅かな同行の仲間に入つてをる。實に是れ容易ならぬこと、申さねばならぬ。誠に旨ひたる龜が大海に漂うてをる浮木の孔に尋ね遇うたよりも、天の上より絲を垂れて波の上の針の孔に通したよりも不思議であると申さねばなりません。

二、此不思議の御縁を結んだのは誰の力であらうか。自分の過去に播いておいた善根の力であらうか。さうではない。自分は今日自ら呆るゝほどの罪惡に沈んでをる。往事を想へば打撃かるゝやうなことがかりである。どうして我が歴史の上に善の文字などがあらう

か。此世に於いて既に此の如くであれば前世にても亦同様であつたに相違ない。さすれば此不思議の御縁は全く是れ自分の力ではない。他の人々の御蔭である。即ち親の御かげであり君の御かげであり師友の力であり兄弟の力である。善く考ふれば家人親族郷黨社會其外の色々の人色々の物の恩恵によつて此御縁を結ぶやうになつたのである。されば無数の恩恵は私にとつては皆私をして慈悲に向はしめたる手引であつた。既に私を御慈悲に導く手引であれば其恩恵は皆是れ御慈悲の大本より流れ出でたものに相違ありませぬ。それ故唯一の大慈悲より流れ出でたる無量の恩恵に包まれて此唯一の大慈悲に向はしめられたのが私の身の上であります。私共固と恩知らずの身而も之を思へば些ながらも此御恩を感じずをることができぬ。之を感じて見ればどうして少しなりとも之を我同胞に傳へず居られやうか。殊に此大慈悲の如來は十方の衆生と呼びかけたまうて我無量の同胞が悉く皆御膝下に集まらんことを望ませたまふのである。

それ故私共は此大御心を仰ぎ奉つて一人だも多くの同胞に斯道の大義を傳へて一人だも多くの同行を得て俱に共に御親の御許に歸りたと思ひます。かくて日に加はつて參る同行の兄弟姉妹と共に過ぎ來しかたの淺ましかつたことを語り合ひ唯今と行末との幸を語り合つて斯道の進修をつとむることは單に私共同胞自身の喜びばかりではない之を見たまふ御親はどのやうにか喜びたまふことでありませう。

三 是に於いて私共苟も佛の子たる者は皆各々神聖なる傳道の大任をもつて居る者であることを忘れてはなりません。他力の信をえん人は佛恩報せんためにとて、如來二種の回向を十方にひとしくひろむべし愚かであるともかまはぬ貧しくあるともかまはぬ卑くあるとも厭ふ所ではない。斯道は智力の道でなく金力の道でなく權勢の道でない信の道である御慈悲の靈威の道である。何もしらねども佛の加備力の故に尼入道などのよろこばるゝをきゝては人も信をとるな

傳道の大

「正像末

「御一代

「一宗の繁昌とま
うのおほく
あつたり
威の大き
ることに
候一人に
の信をも
るが宗
の繁昌に
「代開書」
下巻」

り、唯信あり御慈悲の靈威を感じてをる者ならばその信により其靈威によつて思ひ言ひ行ふ時茲に大なる傳道が成し得らるゝのである。大なる傳道とは必ずしも人の多く集まるをいふのではない。一人にても二人にても眞實に其同胞の胸の中に信念の確立せらるゝやうになるのを申すのである。如來の僧伽の王國は信のみの礎の上に打立てられたものであります。

四、されば私共一切の方面よりこの神聖のつとめのためにいさゝかなりとも力を捧げやうではありませぬか。王は王の位に在り民は民の位に在り子は母の膝に在り娘は親の家に在り學者は學者工人は工人官吏は官吏農夫は農夫各其地位に在つて各々其誠をさゝげやうではありませぬか。書を讀む者は眞心こめて書を讀む。機織る女は眞心こめて機を織る。鑿を採る者は眞心こめて鑿を採る。琴を弾する者は本氣に琴を弾する。誠は佛の光の閃き出づる處である。私共各々かくの如く其處に隨つて其位を守り誠を以て各自の役目にいそし

僧伽の版
圖を擴張
すること

む時恐多けれど如來は煥爛の後光を我が上に冠らしめたまふのである。而して御心は愈々私共の胸に溢れ御力は益々私共の腕に流れおふけなくも此卑しき我を通して其御光を我が同胞兄弟に放ちたまふのである。さればかくして私共は書齋より工場より座敷より臺所より田圃より講堂より又は病院より囹圄より或は商店より政廳より凡ての處より凡ての時に如來の大御心の御光が愈々麗はしく社會の上に顯はれて正法の御國が益々榮え行くやうに致さねばなりません。かくてどうぞガンヂスの河の沙よりも多い一切の同胞をして俱に此正法の國の民とならしめよ。而して俱にたゞへ奉る御名の聲を以て全世界到處に聞こえしめて如來の尊號甚だ分明に十方世界に普く流行すとの御語をして現實ならしめよ。此社會を修羅の庭とせず叫喚の地獄とせず唯佛德讚仰の稱名と伽陀とのみ響き渡る神聖の樂堂とすることは凡ての佛教徒の理想であつて私共の報恩の經營も亦此中心を離るゝことはできません。即ち僧伽の版圖を擴張すること

是が二千四百年來受け傳へて來た主義であつて、一つでも此王國の礎を多くするため、二千四百年間の心靈上の健闘は續けられたのであります。

五、かくて私共は堅に古今に亘つて多くの聖賢と俱に同一の大悲を喜ぶと共に、又横に四方に亘つて多くの同胞と俱に同一の大道を樂む。外國の者も、内國の者も共に此旨を樂む。既に此世を去つた者も、猶此世に残る者も共に此法を喜ぶ。同胞は互に面を相見ぬであらうけれども、襖を一つ隔てゝをると同じ位の思に過ぎぬ。或は又互に面を少しも知らぬこともあらう。けれども、同一の御名は彼の唇より此の唇に常に通はせられてある。同一の信念は此の胸より彼の胸に絶えず往來を致してをる。年百を隔ち千も隔つてをれば私共が眼は先進を見ず私共の耳は先進の聲を聞かぬ。而も今我が胸に動き來る慚愧懺悔の念は古の聖賢の胸に動いたものと異らぬ。近く我が心の上、に匂ふ歡喜感謝の思は遠き善知識の心の上に匂うたものと大小こそ

ちがへ、其趣は少しもちがはぬ。されば時間空間の制限が全く我にはなくなつて、我は常に東西古今の同行と同じ信念の波の上に泳いでをるのである。我が今我罪の餘りに深いのに打戦くと同じく彼等も亦之に打戦かれたのである。我が今御慈悲の餘りに厚いのに成泣すると同じく彼等も亦之に成泣せられたのである。同一信念の潮は遠く本佛の如來の御胸より釋尊の御胸に出で、而して古より今に遠くより近くに常に流れ回るのである。同一讚仰の稱名の聲は遙に如來正覺の初會より響きそめて、王舍城の囹圄に傳へられ、それより廣く彼方此方の幾億の同胞の上に鳴り渡るのである。實に身は埴生の小舎に在るとも、靈の僧伽は廣大である。縦ひ鐵窓の下に呻くやうなことがある。列祖茲に來りて我を救へ、聖賢茲に集ひて我を慰め、一人居て喜ばば二人と思へと仰せらるゝ宗祖聖人は常に此に入つて我を勵まし我を諭したまふ。其上に我を善き友ぞとたゞへたまふ釋尊の大御心亦我上に臨ま

常住三寶
の現前

せたまふ。而して常に照護の御めぐみをやすめたまはぬ阿彌陀如來の大御光はたえず我土に雨の如く其大御心を注がせたまふのである。恐かなること私共は王后韋提希に勝つてを。日々の苦惱は王舎城の牢獄に劣らぬ。而して釋尊が靈鷲山の御座を去つて彼の獄中に降り目健連及び阿難の兩尊者が其處に來り本佛の阿彌陀如來亦御相を其中に現はしたまへると同じく私共亦日々如來常照護の御光を浴び釋尊の御教に誠められ諸の聖者の御語に導かれてを。我が日々の生活が即ち是れ王舎城の囹圄とちがひませぬ。光榮ある身の上なるかな。此光榮を思へば勞苦縱し益々加はり來るとも私は忍んで參らう。涙り出づる悲の涙をも拂ひ濁さかへる苦の痛みをも抑へて私に堪へて進まう。まして此悲の涙にも苦の痛にも其中にたふとき指導の御心が動かせられてあれば私は此悲の中にあつても痛の底にあつても感謝しつゝ奮つて參りたいと思ひます。

六 是に於いて私共は現前の日々の生活の上に神聖の三寶の具は

りたまふことを感じて參ります。即ち古今東西の無數の聖賢同行と共に我心は常に俱に居る。この靈の僧伽の上に如來臨ませられて而して大法の御旨を常に私共に示し私共をして之を心に持つて忘れぬやうに力を添へさせたまふ。嗚呼如來聖法聖會の三寶正しく我上に靈在す。至尊の御父我上に在り常住の法燈我手にあり至靈の僧伽我が身を圍む。私共いさや此御父の靈威と大慈とに憑りこの法燈を廣く世にかゝげつゝ我が僧伽の同胞と共に奮つて進まうではありませぬか。

七 釋尊は宣はせられた。

同胞に對して平等なれ。敬愛に於いて一清淨に於いて一道に對する誠實に於いて一なれ。而して世界到る處に道を宣べて。竟には一切群生をして正法の國の民たらしめよ。是れ正に神聖の同胞なり。如來の僧伽なり。

私共は此御遺言を空しう致してはなりません。

若し御佛の御名が此世に在まらずば、このはかない私共、どうして長
 べに淨らかな光ある身の上となることができやうか。如來の御名は、
 まことに私共のための命であります。
 若し御名の御法が此世に在まらずば、このおろかな私共、どうして明
 に世と己との旨を知ることができやうか。御名の御法は、まことに私
 共のための光であります。
 若し御法の同朋が此世に在まらずば、このかよわい私共、どうして倦
 ます退かず、まことの道に進むことができやうか。御法の同朋は、まこ
 とに私共のための力であります。
 茲に伏して、このはかない鼎の命となつて下さるゝ如來の御名、この
 おろかな鼎の光となつて下さるゝ御名の御法、このかよわい鼎の力と
 なつて下さるゝ御法の同朋、この三つの御恩に對して、謹んで御禮を申
 します。このめぐみ願はくば、とはに世にあまねかれ。

南無阿彌陀佛

佛慧功德をほめしめて、 十方の有縁にさかしめむ。
 信心すでにえんひとは、 つねに佛恩報すべし。

—「淨土和讃」

正信偈講話終

此小講話を世の同行に類つについて、佐々木月樵、鳥敏の兩道兄と、故郷に在る家兄とは、一方ならぬ力をそえられました。殊に原子廣宣君の盡誠は申し盡くしがたい程である。猶ほ精美堂も諸君も印刷について、誠實に意を加へてくれました。一冊の講話も、全く多大の厚誼の結晶であります。茲に謹みて御禮を致します。

明治四十年七月五日、千葉にて、鼎

明治四拾年七月拾五日印刷
 明治四拾年 日發行



定價 金壹圓五拾錢
 郵稅 金八錢

版權所有



著 作 者 多 田 鼎

發 行 者 原 子 廣 宣

東京市小石川區白山前町三十一番地

印 刷 者 編 澤 幸 三 郎

東京市小石川區久堅町百八番地

印 刷 所 精 美 堂

發 行 所 東京市小石川區白山前三一
 振替貯金口座番號三一三二二 浩 々 洞 出 版 部

發 賣 所 東京市小石川區白山前町 無 我 山 房

浩々洞編著出版部發行書目

清澤滿之	精神講話	(版八)	金三十錢郵稅四錢
清澤滿之	佛教講話	(版新)	金三十錢郵稅四錢
清澤滿之	我信念	(版三)	金五錢郵稅二錢
清澤滿之	修養時感	(版四)	金卅五錢郵稅四錢
清澤滿之	懺悔錄	(版新)	金七十錢郵稅八錢
清澤滿之	宗教哲學骸骨		金十五錢郵稅四錢

曉烏敏	吾人之宗教	(版四)	金廿五錢郵稅四錢
曉烏敏	死の問題	(版四)	金二十錢郵稅四錢
曉烏敏	宗教清話	(版再)	金十五錢郵稅二錢
曉烏敏	心靈夜話	(版再)	金二十錢郵稅四錢
曉烏敏	迷の跡	(版再)	金四十錢郵稅六錢
曉烏敏	求道錄	(版再)	金三十錢郵稅四錢
佐々木月樵	實驗之宗教	(版五)	金五十五錢郵稅八錢
佐々木月樵	救濟觀	(版三)	金廿三錢郵稅四錢

佐々木月樵 秀存百話 (版三) 金十錢郵税二錢

佐々木月樵 佛教之真髓 (版二) 金二十錢郵税二錢

佐々木月樵 光明の親 (版三) 金三錢郵税二錢

多田 鼎 修道講話 (版二) 金廿三錢郵税四錢

多田 鼎 正信偈講話 (刊新) 金壹圓五拾錢小包料金八錢

多田 鼎 大聖釋尊 (刊新) 金八錢郵税二錢

多田 鼎 光明の生活 (版三) 金三錢郵税二錢

多田 鼎 光明の人 (版三) 金三錢郵税二錢

和田龍造 他力宗教論 (版四) 金卅五錢郵税四錢

和田龍造 人生問題 (版再) 金二十錢郵税二錢

和田龍造 宗教管見 (版再) 金二十錢郵税二錢

和田龍造 龍樹の佛教觀 (版再) 金三十錢郵税二錢

和田龍造 三經交際論 (刊新) 金五十錢郵税共

和田龍造 阿彌陀經達意 (版再) 金十五錢郵税四錢

稻葉昌丸 エビタクの教訓 (版再) 金六十錢郵税八錢

安藤州一 清澤先生 信仰坐談 (版再) 金廿五錢郵税四錢

清澤滿之 多田鼎
佐々木月樵 曉鳥敏

佛教之信仰

(版再)

金三十錢郵稅四錢

清澤滿之 多田鼎
佐々木月樵 曉鳥敏

精神主義

(版四)

金三十錢郵稅四錢

清澤滿之 多田鼎
佐々木月樵 曉鳥敏

續精神主義

(版再)

金三十錢郵稅四錢

清澤滿之 多田鼎
佐々木月樵 曉鳥敏

靈的生活

(版再)

金三十錢郵稅四錢

浩々洞編

歎異鈔

(版三)

金五錢郵稅二錢

南條文雄

歎異鈔講話

(刊新)

金八拾錢郵稅八錢

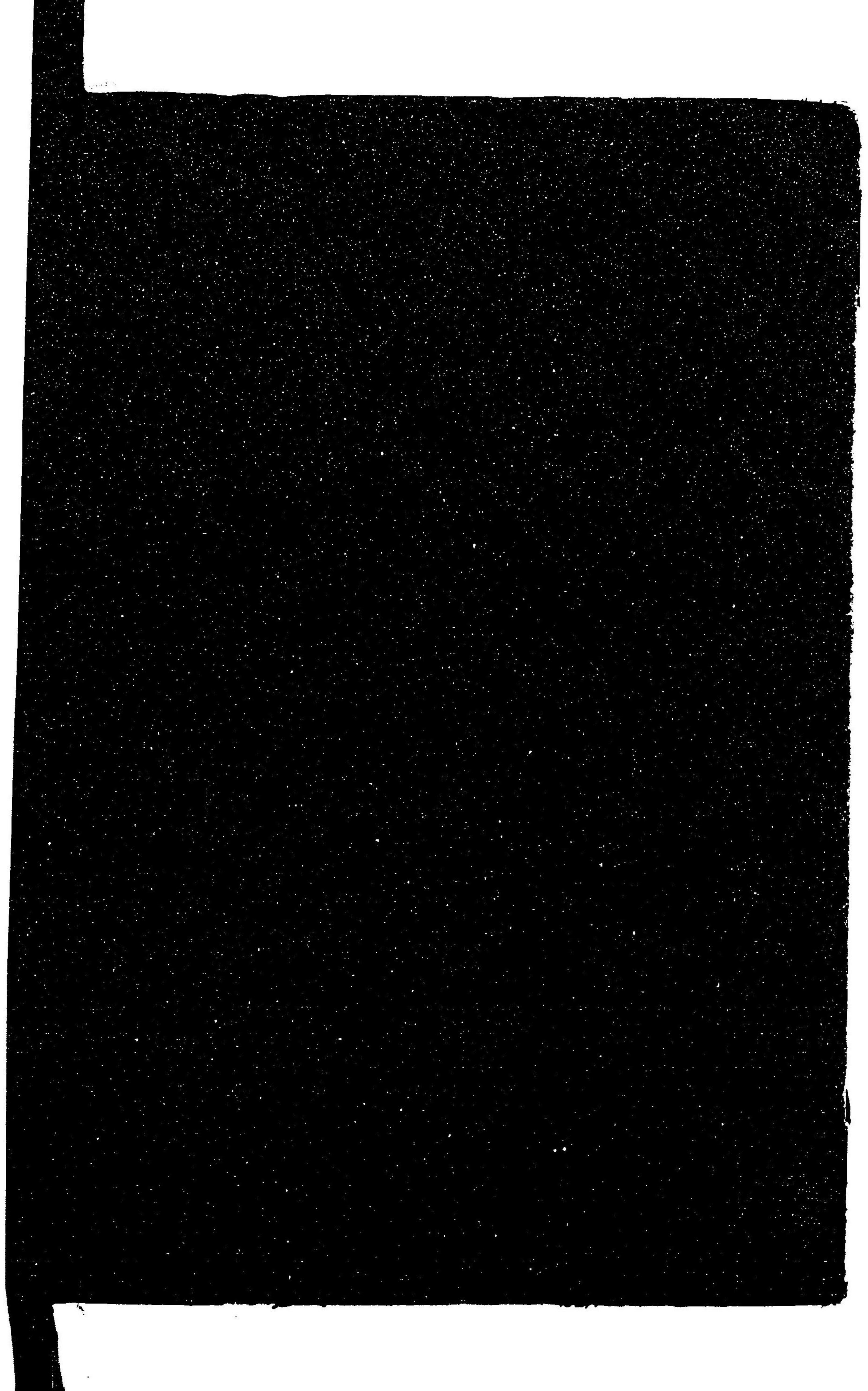
齋藤唯信

信仰と修養

(版再)

金廿五錢郵稅四錢

324
46



324
46

018110-000-9

324-46

正信偈講話

多田鼎/著

M40.8

ABF-1195



